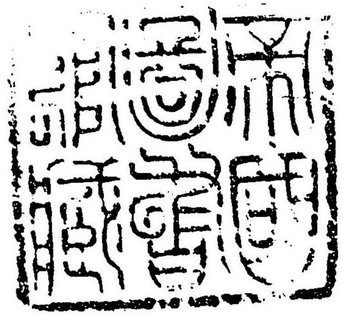
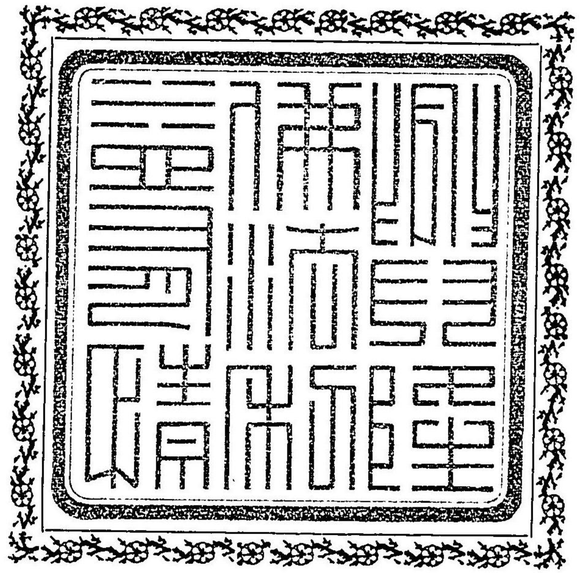
承陽大師御傳記

全

91-16





承陽大師自讃自賀御肖像　泰平寺所藏

小川一眞印行寫眞版

自序

百世以後の人を以て。百世以前の人を寫し出すは。天下の難しとする所なり。況や凡庸の筆を以て。千古の大聖を寫し出すは。其の難きこと。更に之より甚しきものあり。然り而して予不敏を顧みず。敢て之を爲す所以のものは。萬已むこと能はざるものあるを以てなり。蓋し從來我が宗の高祖承陽大師を傳記するもの。其の數頗る多し。然れども大概孟浪杜撰。中に就きて稍完全と認むべきものは。獨り建撕記あるのみ。建撕記の後。紀年錄あり。實錄あり。乃至行狀記等ありと雖も。一に型を建撕記に取り。唯文を和漢に譯し。事を詳畧に叙するに過ぎざるなり。然り而して其の建撕記なるもの。實に大師滅後二百年の左右に。撕師其の檀越の需に應じて。一

時之を記草せられたるものなれば。自家見聞の記憶より。其の畧傳を作られたるに過ぎざるなり。是を以て後世建撕記を稱して。祖傳中の巨擘と謂ふと雖も。尙太祖國師一時の示衆に係る傳光錄に遜色あるが如し。然らば則ち我か宗には。古來大師の本傳なしと謂ふも。誰か之を然らずとせんや。且夫大師の我が國に弘敎傳道せらるゝや。自ら其の本旨たる所の宗體宗義宗風なるものあり。然るに從來の祖傳は。此の三つのものを祖書に讓りて。敢て之を闡明せず。即ち龍を畫きて睛を點ぜざるが如く。誠に惜しむべきものなり。故に古來稱して祖傳と謂ふもの。猶其の本傳に非ず。而して又未だ其の弘敎傳道の本旨を記したるものあるを見ず。是予が自ら揣らずして。敢て本書を編述したる所以なり。然れども百世後人

の凡庸を以て。百世前人の大聖を寫すことなれば。假令大師一生の示衆垂範を經とし。從來の祖傳及び當時の史乘を緯とすと雖も。謂はゆる本傳と稱すべきものは。未だ輙ち之を編修すること能はず。況や大師弘敎傳道の本旨たる宗體宗義宗風に至りては。實に甚深微妙にして。輙く之を開演せんことは。管見蠡測予が如きものゝ能くする所にあらず。然るを敢て私見を錄するに至りたるは。上み大師に對し奉り。下も大方に對して。誠に慚惶の至りに堪へざるなり。且予多年錫を紅塵萬丈の中に卓し。日夜驢を送り馬を迎へて。實に寸暇を得ず。此の書筆を前年の臘末に援り。今年仲春に至りて漸く稿を脫す。專ら速成を主としたるが爲めに。甚だ孟浪杜撰なることは。其の罪誠に辭する能はざるなり。然り而して予の

匆卒此の擧に出づる所以のものは他なし。明年壬寅は。實に大師六百五十回の忌辰に丁るを以て。乃ち宗門内の雛僧及び檀信中の兒女をして。大師一生行狀の萬一を知らしめ。且之をして以て恩海の一滴を報謝せしめんと欲するの微意のみ。蓋し恩を知り恩に報ゆることは。佛祖門下の最大要務なればなり。而して予は又他日帝京の雜事を謝し。青松白石の間に退休し。必ず本書を大成して。以て上み大師に謝し奉り。下も大方に謝せんことを誓ふ。切に冀くは。世間有道の君子。本書の瑕玼を指點し。予をして他日の訂正に資する所あらしめんことを。本書刻將に成らんとす。因つて編述發願の要旨を叙し。併せて大師に懺謝し奉り。又大方の君子に陳謝す。

明治三十四年五月二十八日　　默地說三薫沐謹識

凡例

一　道元禪師を大師と稱するは。今上陛下勅賜の謚號を用ふるなり。其の他大師を記するに。總べて敬語を用ふるは。法孫の祖師に對する禮なり。

一　太祖國師の傳光錄は。大師滅後四十八年。即ち正安二年の示衆なれば。予は之を大師の行狀を記したる最古の書とす。而して太祖國師は。小少より二祖孤雲三祖徹通の兩師に久參親炙せられ。大師の行狀は。口授心訣。一の遺漏あることなし。爾かのみならず傳光錄垂示の當時は。三祖徹通禪師傍に在りて。之を證明せられき。是予が本書を作るに當り。大師の遺著に亞ぎて。尤も傳光錄に依據したる所以なり。

一　古來大師を傳するもの。大概當時の國勢及ひ教況を言はず。然れども之を寫すに非ざれば。以て大師弘教傳道の本旨たる濟世利民の誓願を認識すべからず。是予が特に之を併せ記する所以なり。

一　名を賣り譽を買ふは。大師の最も深く厭忌したまふ所なり。然るを此の書。祖先の系譜を敍し。歴朝の賜號を記し。又其の聖德偉業を頌して。從上の諸佛に比肩す。已むを得ざるものありと雖も。其の罪亦甚だ大なり。

一　大師入宋後。久參の道場は。則ち太白山天童景德寺なり。然るを本書之を畧稱して。天童又は天童山と云ふ。是古來宗門中に於ける習慣の稱呼に隨ふなり。

一　大師在宋の間。江西行化の次でに。拄杖を以て猛虎を慴

伏せられしと謂ふものあり。予は別に見る所あるを以て。之を本書に記せず。

一　波多野義重の妾。良死せずして厲鬼と爲る。大師之に法脈を授與せられしに。厲鬼忽ちに出離得脱せり。事甚だ殊勝に似たり。而かも是佛祖屋裏尋常の施設。固より異とするに足らず。予故に之を本書に載せず。

一　古來宗教の祖師を行狀するに。徒らに神祕奇蹟を眩耀して。之を人類以上の神靈と爲さんとするもの多し。而して其の謂はゆる神祕奇蹟なるもの。牽强附會揑造誣妄。大概證左を存せず。然るに我が大師の天地の理致と道交したまふや。支那に於ける稻荷明神の救急授藥。韋駄尊天の歸朝慫慂。白山權現の寫本助筆。大權菩薩の同航來

朝。觀音大士の難船救護。日本に於ける天華亂墜。彩雲
鬚鬣。異香馥郁。羅漢現瑞。神鐘靈響等の如きは。一一
證憑の顯赫たるものありて。毫も擬議を容るゝの地なし。
是予が之を本書に列擧する所以なり。然れども若以色見
我。以音聲求我。是人行邪道。不能見如來なれば。學道
の君子。高く眼を著くへし。

一 大師入宋の後。兩次寧宗皇帝に上奏せられし表文。及び
天童如淨禪師に請問並びに禪師の垂誨。乃至其の他の事
歷に於いて。漢文を和文に譯し。間又難解の玄旨妙曲を
意譯せしものあり。或ひは括弧を施して註釋を下せしも
のあり。是皆童蒙に便するが爲めなり。

一 大師の聖教は二祖孤雲禪師に依りて。今日に綿々相續す

ることを得。故に予は之を報謝する爲め。本書特に其の
小傳を載す。蓋し二祖禪師の傳は。世に別本刊行せざる
を以てなり。而して二祖禪師の所期及遺囑に。大師忌八
個日の佛事の一日の回向に與らんと願ひ。八月二十四日
に入寂せられ。又其の遺骨を大師靈塔の侍者位に瘞まし
めらる。予の其の小傳を本書に特載することは。亦二祖
禪師の高懷に愜ふなるべしと信ず。

一 大師元書法に妙。故に世我が大師と弘法大師日蓮上人と
を併せ稱して。釋門能書の三絶と云ふ。其の斷片零紙と
雖も。實に趙璧も啻ならざなり。然れども我が大師の願
行は。區々たる毛穎管城の小技に在らず。故に今之を本
書に載せず。

一　本書を刊行するに當り。大師の肖像及び其の眞蹟を奉載する所以のものは。大師風采神韻の萬一を描寫せむと欲するの微衷に出づるなり。而して肖像自賛擧是の下に爲非の二字を加へられしが。撮影判明ならず。切に留意を望む。且つ卷尾に永平寺の全圖を載する所以は。大師の盛德洪業の萬一を世間に紹介せんと欲するに出でしなり。

一　大師の本師なる天童如淨禪師の行狀は。面山老師曾て之を撰述せられたり。然れども世間之れを流布すること甚た尠し。誠に遺憾に堪へざるなり。予故に之を本書の末尾に附記す。蓋し如淨禪師に聊か法乳の慈恩を報ひ奉らんが爲めなり。

編者謹識

承陽大師御傳記目次

緒言……初頁
第一章　托胎及び降誕……十四頁
第二章　俗系。法系……十六頁
第三章　生育並びに發心……二十一頁
第四章　出家得度……二十七頁
第五章　更衣及び修學……三十三頁
第六章　傳道弘教の起原……四十一頁
第七章　入宋發程……四十六頁
第八章　天童の掛錫及び僧臘の釐正……五十頁
第九章　秘寶の拜覽及び靈夢の感得……五十六頁
第十章　袈裟及び鉢盂に就きての感慨……六十九頁

第十一章　叢林の遍歴及び異僧の邂逅……七十四頁
第十二章　淨祖に相見……七十八頁
第十三章　明全和尚遷化及び舍利の相傳……八十二頁
第十四章　大師の請問淨祖の垂訓……八十九頁
第十五章　正覺の成就及び大戒の稟承……九十四頁
第十六章　正覺成就後の坐禪辨道……百〇三頁
第十七章　正覺成就後の消息……百〇七頁
其の一　淨祖より侍者に請せられて固辭したまふ
其の二　理宗皇帝より李龍眠の羅漢畫像を贈らる
其の三　中央及び地方官吏諸秀才等を接化せらる
其の四　補陀羅迦山の觀世音菩薩を禮拜したまふ
其の五　稻荷大明神出現して急病を救護したまふ

其の六　韋馱尊天出現して其の歸朝を慫慂せらる
第十八章　歸朝及び其の前後の消息……百十三頁
其の一　天童の告別及び淨祖より法衣を授與せらる
其の二　碧巖錄の書寫白山明神化現して助筆せらる
其の三　大權修理菩薩同航來朝し化儀を擁護せらる
其の四　海上颶風遭難觀音淨聖出現して救護せらる
其の五　肥後國河尻に著船し建仁寺に歸錫したまふ
第十九章　唱道の宗旨……百二十三頁

第二十章　弘教傳道の起點。坐禪儀の撰述　百三十一頁
第二十一章　深草の閑居……百三十六頁
第二十二章　二祖孤雲禪師の歸投及其小傳……百三十九頁
第二十三章　觀音導利院諸堂の建立……百四十七頁
第二十四章　祝國開堂及び傳道儀則の大成……百五十一頁
第二十五章　教化の方針……百五十九頁
第二十六章　興聖寺の在住及び其の化儀……百七十三頁
第二十七章　越前に應化永平寺の建立……百八十三頁
第二十八章　永平寺に於ける化儀……百九十四頁
第二十九章　鎌倉の教化及名藍豐祿の拒絕……二百〇九頁
第三十章　永平寺に於ける祥瑞及靈驗……二百十八頁
其の一　結夏上堂に天華亂墜す

其の二　布薩說戒に彩雲靉靆す
其の三　僧堂內外に異香馥郁す
其の四　羅漢供餐に諸像放光す
其の五　靈山夜話に神鐘暗響す
第三十一章　紫衣及び禪師號の勅賜……二百三十三頁
第三十二章　暖皮肉。活骨髓……二百三十六頁
第三十三章　入滅及び其前後の消息……二百四十頁
其の一　最後の教訓に八大人覺を垂誡したまふ
其の二　永平の法席及び袈裟を弊祖に傳へらる
其の三　檀信の懇請に依りて京都に療病せらる
其の四　後嵯峨上皇の慰問並びに入滅荼毘歸葬
其の五　先帝及び　今帝より諡號を恩賜せらる

承陽大師御傳記目次 畢

考證……二百七十一頁
附錄
天童如淨禪師行錄……二百七十九頁
以上

承陽大師御傳記

法孫　默地說三　謹輯

緒言

欽みて惟るに。我が承陽大師の此の土に降臨ましますや。夙に曠劫の願輪に乘じて。諸佛の正覺を成就し。切に無限の悲心を垂れて。諸佛の聖教を宣揚したまふ。妙機の玄化は普く群品を利濟し。靈德の恩光は遠く萬古に慈照す。其の弘教演法以來殆ど七百年に垂んとし。三萬の法子法孫は燈を聯ね焰を續て蕃衍增殖し。壹萬四千の門葉は五畿八道に碁布星列し。壹千餘萬の檀徒は八十餘州に充滿彌綸し。其の興隆旺盛なること。實に佛教各宗の首班に在り。而して其の教化の普霑し

法益の充洽する所は。啻に治國安民の皇化を贊襄輔翼し。臣民の倫理綱常を維持し。治生産業を開道充實せしのみならず。四生六道をして。齊しく出離得脱の勝果を得しむ。是我が大師靈德の恩光妙機の玄化。之を攝取し之を濟度するの然らしむる所にして。其の神通妙用誠に不可思議不可商量なりとす。菩薩清涼の月は。畢竟空に遊ぶ。衆生心水淨ければ。菩提の影は中に現ず。蓋し我が大師の此の土に降臨ましますは。恰も教主釋尊の印度に出現したまひ。達磨大師の支那に來儀したまひしが如くにして。佛祖の聖眼。常に衆生の機根を照鑒ましまして。百千萬刼に機根の調熟を待たせたまふ。凡そ衆生顚倒して苦海に沒在し。憂悲苦惱其の身に逼迫して。始めて佛祖の加被を願求す。即ち戀慕の情。內に動き。渴仰の色。

外に露る。衆生の機根既に調熟して。教主釋尊は靈鷲山に出現ましまし。達磨大師は少林山に來儀まします。我が大師の此の土に降臨ましますも亦復此くの如し。熟〻按ずるに。我が日本の建國せらるるや。皇祖皇宗仁慈智勇。天に繼ぎて民庶に君臨したまひ。爾來政教俱に惟神の道と稱し。天然の性行敢て修治を假りたまはず。崇神、景行、應神、仁德を經て皇圖益〻鞏く。推古、孝德、天智を經て制度愈〻定まり。上下淳朴君民緝熙。四海の內復堯德舜仁を知らざりしに。世降り俗移り。中世に至るに及び。乾綱漸く紐を解き。文武の政は大概之を相將に委ね。而して政權遂に藤原氏に移りしが。數世を經て藤原氏も亦其の政を失ひ。而して政權遂に武門に歸するに至れり。後白河天皇の保元元年は。我が大師の降臨

に先つこと四十四年にして。謂はゆる保元の亂あり。其の後四年にして謂はゆる平治の亂あり。蓋し當時の情勢たる。或は皇位の爭奪に係り。或は武臣の軋轢に生ぜしと雖も。是皆中世以降文恬武熙の間に胚胎したる禍機の。一時に潰裂四出したるものにして。是より以後滔々たる頽勢復之を挽回すべからず。平治以後は。平氏政を專らにして。頗る横暴を極め。遂に源氏の滅す所となり。安德天皇西狩の駕竟に回らず。尋いで源頼朝覇府を關東に開き。國司に守護を置き莊園に地頭を設け。自らは天下の總追捕使となり。坐して朝廷の政柄を横竊せり。是我が大師の降臨に先つこと十五年なりとす。而して大師降臨の後二十年に。北條義時竊に源氏を弱めて國命を執り。大師降臨の後二十二年には。北條義時大兵を擧げて

禁闕を犯し。仲恭天皇を廢し。後鳥羽上皇を隱岐に。順德上皇を佐渡に。土御門上皇を土佐に遷せり。嗚呼、大師降臨前後の國勢は。祖宗建國以來一千八百餘年の間。未だ曾てあらざるの慘怛悽愴の狀を現出し。武臣の兇逆暴恣是に至り氾濫横溢して其の底止する所を知らず。一系聯綿金甌無缺の國體も。其の命脈誠に一髮の千鈞を繫ぐが如く。上下顚倒し天地反覆し。大八洲の山河殺氣充滿し。祖宗の生民皆其の堵に安んずること能はず。而して中世以來南都に平安に。各〻門戸を開張したる佛敎各宗數萬の僧侶は。悉く利生濟世の任務を有すと雖も。復之を加何んともすること能はず。豈慨歎の至りならずや。昔欽明天皇の朝に。百濟國より佛像佛器經卷等を貢献し。佛法の名相僅に我が國に傳りしが。其の後布敎傳道の

僧衆。海を渡りて來朝し。尋いて聖德太子の出現ありて。大いに佛教を興隆せさせられ。爾來三論、法相、華嚴、倶舍、成實、律等の各宗漸次に開立し。皇室及び庶民の歸仰を得て。南都の頃は頗る隆昌を窮め。大小の法幢益〻宣傳播揚せり。桓武天皇平安に都したまふに及び。傳教大師天台宗を開き。弘法大師眞言宗を創め。一は顯密二教を以て教旨を樹立し。一は純一密教を以て法風を宣揚し。其の教化朝野を聳動し。一世を風靡したりき。降りて高倉天皇の朝に至り。圓光大師淨土宗を創め。念佛稱名他土の往生を唱道して。亦都鄙の間を教化せり。然り而して以上の各宗は。或は性相の幽微を開闡し。或は羯磨の勝緣を奉勤し。或は八邪の迷執を洗淨し。或は法界の緣起を詮顯し。或は教觀の玄旨を窮極し。或は秘嚴

の蘊奥を體悉し。其の他大小權實の經典。竺漢諸祖の論釋を傳承すと云ふと雖も。我が大師の聖眼より之を見破したまふときは。大概心外に正覺を求むるものにして。文に依つて義を解し。徒らに名相言句の葛藤に繫縛せられ。直指單傳の涅槃妙心は。尙證悟するに由なく。自未だ自の落處を知らず。焉ぞ能く他の落處を指定することを得ん。是を以て我が大師。或る時參學には正師を求むべきことを示し。我が朝從來各宗の先德に。眞實の佛法を傳承したるものなきを慨きたまひて曰はく。「但我が國には昔より正師未だ在らず。何を以てか之が然ることを知るや。言を見て察するなり。流れを汲みて源を討ぬるが如し。我が朝古來諸師の編集したる書籍に。弟子を訓へ人天に施すに。其の言是靑くして其の語未だ熟せず。未

だ學地の頂に到らず。何ぞ證階の邊に及ばんや。只文言を傳へて名字を誦せしめ。日夜他の寶を數へて。自ら半錢の分なし。古の責め之に在り。或は人をして心外の正覺を求めしめ。或は人をして他土の往生を願はしむ。惑亂之より起り。邪念之を職とす」と。蓋し我が大師の一代言教は。專はら攝受を本とし。勉めて折伏を用ふることを好みたまはず。曾て愛語の功德を勸誡して。「怨敵を降伏し。君子を和睦ならしむること。愛語を根本とするなり。向かひて愛語を聞くは。面を喜ばしめ心を樂しくす。向かはずして愛語を聞くは。肝に銘じ魂に銘ず。乃至愛語よく回天の力あることを學すべきなり」とのたまひしに。尙且如上の訓誡を垂れて。日本各宗祖師の脚跟を指斥したまふ。蓋し法の爲め道の爲めには。毫も人情を容れ

たまはざるなり。當に知るべし我大師の佛祖の大道を單傳し來りたまはざる前には。唯佛法の文言を傳へ。佛法の名字を誦せしのみにして。眞實佛祖の大道を知るものなかりしことを。恰も是支那に於て達磨大師西來以前は。佛教傳來して到處に宣布せりと雖も。眞實佛祖の大道を知る者なかりしが如し。夫各宗先德の立教開宗の基礎は已に此くの如し。是を以て南都の朝に隆昌を極めたる諸宗門は。漸次に衰頽して。皇室及び庶民の信仰を維持すること能はず。其の纔に舊觀を存せし法相宗の如きも。法久しくして弊生じ。弊生じて法衰ふ。而して平安奠都の際に興りたる天台宗は。其の後山門寺門の兩派と爲り。眞言宗亦古義新義の二派に分れ。當時の僧衆にして其の上流に位するものは。或は論釋章疏の末節に汲々と

して。謂はゆる海に入りて沙を算ふるを事とし。或は誦呪讀經加持祈禱を業として。布教傳道利生濟世の本分を拋棄す。上流の僧衆にして且然り。其の下流に至りては推して知るべきなり。當時山門及び寺門は學匠の淵叢と稱す。然るに我が大師成童の時に於ける本來本法性。天然自性身の疑問に就き。其の碩學宗匠と稱するものゝ之に答ふること能はざりしに於いても。其の學風の衰頽したることを證するに餘りあり。寺門山門已に然り。他は推して知るべきなり。啻に爾のみならず。是より先山門寺門の僧徒は。兵甲相爭ひて互に殺戮焚掠し。又法相天台の僧徒は。南北相攻め。或は源平氏と相戰ひ。或は又兵を發して朝廷に强訴し。放逸横肆實に其の極に達す。啻に九五の至尊をして慨歎せしめ奉りしのみならず。又當時

の人心をして之を厭忌せしめたり。宜なり當時佛教の感化力なるもの。世道を扶植し人心を調御すること能はず。上下君臣の大義名分より。父子夫婦兄弟朋友等の彝倫綱常は。蕩然として地を掃ひ。大八洲の山河。晦冥闇黑。業火熾然。甥にして叔を殺し。兄にして弟を殺し。父にして子を殺し。子にして父を殺し。臣にして君を弑し。陪臣にして天子を廢し。其の甚だしきに至りては。父子三帝を千里の窮海に蒙塵せしむるに至る。平清盛是れなり。源義朝是れなり。源頼朝是れなり。北條義時及び北條泰時是れなり。而して此の輩の官爵を問へば。曰はく從一位太政大臣なり。曰はく從四位下左馬頭なり。曰はく正二位征夷大將軍なり。曰はく正五位下相模守なり。曰はく從四位下武藏守なり。而して此の彝倫を紊り

綱常を斁りたるの輩は。義朝を除くの外は。遞次に當時の國柄を掌握して。以て民庶の休戚を負荷するものとす。祖宗愛撫の生民。佛祖慈育の衆氓。此の天地闇黑。殺氣充滿。業火熾然の間に煩悶惱乱し。復將た誰にか依安せんや。菩薩清凉の月は。畢竟空に遊ふ。衆生心水淨けれは。菩提の影は中に現す。抑〻衆生顚倒して苦海に沒在し。憂悲苦惱其の身に逼迫して。始めて佛祖の加被を願求す。衆生の念想。已に佛祖の加被を願求し。其の戀慕渴仰の情。佛祖大慈大悲の心と感應道交し。一道の神光。耿々として天の一方より來り。人天の大慈父と爲り。天地を光明にし業火を消滅して。苦海沒在の衆生を攝取し。憂悲悶亂の衆生を濟度す。是則ち我が承陽大師に非ずして誰そ。是則ち我が承陽大師に非ずして將た誰

れとかせん。大師示寂の後六百二年。嘉永七年二月二十四日。先帝孝明天皇は。大師一代の化儀を贊歎ましまして。特に佛性傳東國師の徽號を追諡したまひ。且つ勅黃を永平寺に下したまへり。其の綸言は。實に大師の化儀を詮顯表彰せさせられて復餘蘊なし。則ち左の如し。

勅す。吉祥山永平寺開基道元禪師は。本華胄より出でて。便ち桑門に入る。重瞳室を照して。夙に人天の師を表し。一葦海に航して。遙かに佛祖の道を求む。禪慧圓淨にして。彼の震旦の雲を辭し。身心脫落して。我日出の邦に歸る。有爲の法を觀じて。萬物を普濟し。無礙の慈を以て。衆生を覺悟す。興聖を城南に創め。吉祥を北越に闢く。玄化徧く覆ひて。芳聲遠く播き。九重想を延きて。萬里誠に契ふ。

相門は貴を降り。武夫は勇を銷す。盛なるかな妙機。大なるかな道德。爾來。瓜瓞綿々として。永平六百の星霜を閲みし。馨香芬々として。楓宸一脈の天風に薫ず。緬に厥の人を懐ふ。豈に徽號なからむや。宜しく佛性傳東國師と謚すべし。

第一章　托胎及び降誕

人間の如來は人間に同じて此の世に出現ましますこと。是れ十方三世諸佛の世間に出現したまふ常軌なりとす。日本曹洞宗の高祖。敎主釋迦牟尼世尊第五十一世の正嫡。永平寺開山。勅諡佛性傳東國師承陽大師は。諱は道元。希玄と號し。俗姓は源氏にて。村上天皇九世の孫なり。父は內大臣右近衛大將

東宮大傅贈從一位久我通親公。母は攝政太政大臣從一位基房公の女藤原氏。大師胎に在すこと十有三月。土御門天皇正治二年正月二日京都に降誕したまへり。時に天香馥郁として瑞光室を照らす。其の胎に在すや。一日空中に聲あり告げて曰はく。貴孕は是五百年來の大聖にして。正法を日本に弘通する爲め降臨托胎すと。生るゝに及び博士之を相して曰はく。七處平滿にして骨相奇秀なり。眼に重瞳ありて至聖の虞舜に齊し。必ず常人に非ず。唯恐る父母の天壽を永享せざることを。嗚呼日本各宗派の祖師。其の數四十餘人ありと雖も。我が大師の如き名門華胄に托胎ましましものは實に稀なり。蓋し大師の降臨は釋迦牟尼世尊の迦毘羅城宮に降りたまひ。達磨大師の香至王城に降りたまひしに倣はせられたるには非

ざるか。而して人間の如來は人間に同じて此の世に出現ましますと雖も。空中の靈告聖示は已に先天の神祕を漏洩し。降誕の英姿異貌は亦射斗の劍氣を吐却す。何ぞ其の氣魄の雄渾壯大にして。神を慴れしめ鬼を懾れしむるの威靈あるか。大師降誕の正治二年正月二日は。之を太陽曆に推算すれば。實に神武天皇紀元一千八百六十年一月二十六日に丁れり。輓近曹洞宗務局より全國の僧侶及ひ檀徒信徒に令し。此日を以て大師降誕の報恩會を修行せしむ。

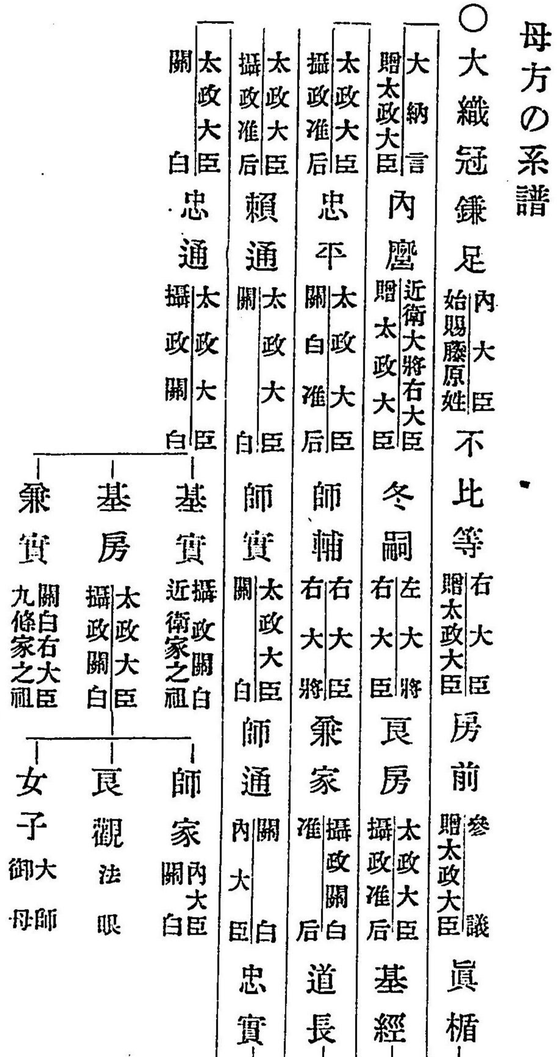
第二章　俗系。法系

父方の系譜

- 人皇第六十二代 ○村上天皇
  - 具平親王
    - 師房（賜姓大源臣）
    - 顯房（右大將）
    - 雅實（左大政大臣）
    - 雅定（右大將）
    - 雅通（內大將）
    - 通親（內大將）
      - 通宗（贈左大臣）
      - 具通（堀川大納言）
      - 通光（太政大臣大將）
      - 在子（承明門院土御門天皇國母）
      - 定通（通宗公養子正二位內大臣）
      - 道元（承陽大師）
      - 親子（從一位大納言後嵯峨天皇乳母）
      - 女子（後嵯峨天皇皇子宗尊親王女房）

大師の兄弟は前記の外。定通公と大師との間に。通方(土御門大納言と號す)通行(土御門大納言と號ず)親緣(南都興福寺の別當となり大僧正に補せらる)證空(善慧上人と號し淨土宗西山派の祖なり)あり。又大師と親子との間に。雲快(中山僧正と號す)定親(寺東の長者と爲り大僧正に補せらる)あり。此數人は大師の一生に深く關する所なきを以て。之を省く。又承明門院を。大師の妹と謂ふものあり。然れども大師降誕の正治二年は。承明門院の生みたまひし土御門天皇の御宇なれば。予は之を大師の姉と爲したり。又證空上人は猶子と云ふ說あり。未だ詳ならず。

母方の系譜



以上は。大師の父方及び母方の俗系なり。次に佛祖相承の法系を示すこと左の如し。

釋迦牟尼佛
摩訶迦葉
阿難陀
商那和修
優婆毱多
提多迦
彌遮迦
婆須密多
佛陀難提
伏馱密多
婆栗濕縛
富那夜奢
阿那菩底
迦毘摩羅
那伽閼剌樹那
迦那提婆
羅睺羅多
僧伽難提
迦耶舎多
鳩摩羅多
闍夜多
婆須盤頭
摩拏羅
鶴勒那
師子菩提
婆舎斯多
不如密多
般若多羅
菩提達磨（支那初祖）
太祖慧可
鑑智僧璨
大醫道信
大滿弘忍
大鑑慧能
青原行思
石頭希遷
藥山惟儼
雲巖曇成
洞山良价
雲居道膺
同安同丕
同安觀志
梁山緣觀
大陽警玄
投子義青
芙蓉道楷
丹霞子淳
長蘆清了
天童宗珏
雪竇智鑑
天童如淨
永平道元（日本高祖）

第三章　生育並びに發心

建仁二年大師年三歳。十月二十日嚴父通親公薨去せらる。是より仲兄大納言通具公。大師を鞠育し。鍾愛備に至る。建仁三年大師年四歳。祖母の膝上に在りて。唐人李巨山の詩集なる李嶠雜詠を讀みたまひ。建永元年大師年七歳。周詩一篇を賦して育父通具公に呈し。又毛詩及び春秋左氏傳を讀みて其の義に通じたまふ。是より後一切の文字は其の義趣を了じ。復師訓を待ちたまはず。嘉禎中大師興聖寺に於いて。或る時嫡嗣永平寺第二世孤雲禪師に示して曰はく。「我本幼少の時より。好みて學せしことなれば。今も動もすれば外典等の美言案ぜられ。文選等をも看ることを。詮なきことゝ存ずれば。

一向に捨つべき由を思ふなり」と。是に由つて之を觀れば。幼少にして文學を好みたまひ。又聰明穎異にましましことを知るべきなり。而して大師の文學を好みたまひ。又聰明穎異にましましことは。固より宿習の業力に因由すと雖も。亦其の父祖の遺傳に緣由する所なくんばあらず。蓋し大師九世の祖村上天皇は。即ち世に天曆の明主と仰ぎ奉る所にして。其の治績の歷朝に卓絕したまふことは。國史既に之を悉せり。而して其の文藻に至りては。嘗て內宴に詞臣と同じく宮鶯曉光に囀ずるを賦せられ。天皇の御製先づ成る曰はく。露濃緩語園花底。月落高歌御柳陰。亦其の風雅を管窺し奉るべきなり。大師八世の祖具平親王は。深く自ら抑損したまひしと雖も。天性聰敏學問淵博なりしことは。國史亦之を稱せり。大

師七世の祖右大臣師房公。及び六世の祖右大臣顯房公。父子相俱に俊才篤學。一世の鴻儒博士大江匡房之を嘆異す。大師五世の祖太政大臣雅實公は。啻に當時の良相たるのみならず。亦文章を能くし詩歌に長ず。千載集に「かほる香の絕えせぬ春は梅の花。ふきくる風やのどけかるらむ」は。即ち其詠なり。又其の日乘に久我相國記といふものあり。其の詞簡潔妍麗。以て平生の蘊蓄を知るべきなり。大師四世の祖右大臣雅定公。及び三世の祖內大臣雅通公。亦各々明才博識。父子相繼ぎて淳和奬學兩院の別當に兼補せらる。兩院は當時公卿縉紳子弟の就學する大學校にして。別當は其の總長といふが如き要職なり。大師の父內大臣通親公。亦天資英邁俊逸。才學兼備。日夜騫々として匪躬の節を盡され。當時頗る匡救輔弼

せらるゝ所ありし。而して其の緒餘に屬する。高倉院嚴島行幸記。及び高倉院昇遐記の如きは。其の王事に盡瘁せられし赤誠を認知することを得ると俱に。亦其の文辭の巧妙典雅なるに感歎せずんば非ざるなり。即ち大師の聰敏篤學にましますこと。豈に偶然ならんや。誠に所由ありしなり。承元元年大師年八歳。是の冬慈母藤原氏薨去せられ。悲哀措く所を知らず。斯くて弔葬を高雄寺に修行せしに。大師龕前に跪きて拈香揖拜し。香烟の裊々として上り。篆畫の幻影乍にして生じ乍にして滅するを熟視して。深く諸行無常の理致を感悟し。乃ち出家求道の志しを決定したまふ。是より先慈母の命終に臨みたまふや。大師を枕頭に招き。丁寧に訓誡して曰はく。吾が亡き後には必ず剃髪染衣して。佛法を修行し。逝きにし父母の冥福を資け。兼ねては四生六道の業苦を救ふべしと。大師既に慈母を喪ひたまひ。悲哀痛哭の間。耿々たる念頭其の遺訓を忘れたまふこと能はず。一片の菩提心。龕前の香烟に觸れて。忽ち發露決定したまひしなり。是恰も釋尊應壽十九歳の時。四門に出遊せられ。老者病者死者及び沙門の相を觀し。始めて世間の無常を悟り。出家求道の志を決したまひしが如し。凡そ諸佛の佛法を修證したまふには。必らず發菩提心を以て根基と爲したまはざるはなし。謂はゆる發菩提心とは。世間の生滅無常を觀ずるの心なり。是の故に辟支佛は飛花落葉を觀じて。世間の生滅無常を悟り。釋尊因地の修行には。諸行無常。是生滅法。生滅滅已。寂滅爲樂の一偈を得るが爲めに。拋身捨命したまふ。當に知るべし發菩提心は。

佛法修證の大本要機なることを。然り而して大師の香烟に依りて。菩提心を發露決定したまひしことは。一代化儀の第一起點にして。又此の菩提心は。大師の畢生を指導する羅針器たりしなり。大師後に入宋求法して。天童如淨禪師に上りたまひし書中に。道元幼年にして菩提心を發しきとのたまひ。又後に輪下の後學に。學道の用心を示したまひし中に。菩提心を發すべきことを勸誡して。世間の生滅無常を觀ぜしめられしを見ても。大師の香烟に於ける發菩提心の勝躅を知るに餘りあり。啻に爾のみならず。大師示寂の後四十八年即ち正安二年の春。大師四世の嫡孫勅諡弘德圓明國師總持瑩山禪師は其の隨徒に垂訓して。我が大師發菩提心の機緣は。正に此の時に在りしことを詮顯したまへり。嗚呼大師齠齔の幼童に

して。已に大人の力量を具へたまふ。旃檀の二葉にして薫る。獅子兒生まれて三日。既に獸王の氣を具ふ。古諺吾を欺かざるなり。而して嚴父慈母の長壽したまはざりしは。偶〻曩きの大師を相せし博士の言と相符す。大師に於かせられては或は發心求道の時緣を速かにせられしことありとするも。亦實に大師の不幸なりき。

第四章　出家得度

承元二年大師年九歲。此の春より世親菩薩の俱舍論を閲し。晝夜精を勵まして修學したまふ。人の其の旨を問ふものあれば。辯拆流るゝが如し。耆年宿德も其の頴異に歎服し。擬するに文殊の化身を以てし。眞個大乘の道器と稱せり。此の時

に當り大師の外叔なる。前攝政關白藤原師家公。齡既に不惑にして嗣なかりしかば。深く意を大師に屬し養ひて子と爲したり。蓋し芝蘭玉樹を庭階に栽培し。祖先の緒業を紹繼し。皇家輔弼の棟梁に任へしめんと冀圖せられしなり。是を以て公は深く大師を愛育し。時に親ら相家の庭訓を授け。或は國家の政要を敎へられしかど。大師は心頗る之を厭ひたまひて。出塵の念益〻深し。然れども人間の如來は人間に同じて此の世に出現まします常軌なれば。我が大師は直に出家入道したまはず。暫く時節因緣の純熟を待たせたまへり。恰も釋尊の悉達太子として。淨飯王宮に十有九歲の日月を送られしが如し。建曆二年大師年已に十有三歲。養父師家公將に大師に加冠し。顯要の職に奏薦せんと思はれ。其の期方に定り。補任の職亦將に決せんとせり。蓋し當時の公卿は。大概閥族家例を以て補任せられ。敢て年齒の長幼を問はざるを以てなり。大師纔に之を聞き。自ら忖度したまはく。塵累漸く纏綿して。益〻出離を罣礙す。苟も相家の冢嗣にして。朝廷の卿輔に補せらるゝときは。遽に世を遁れ家を出づべからず。假令幸にして志しを遂ぐるも。頗る皇家の恩眷に辜負し。而して又累を家門に及す。其の罪誠に鮮少ならずと。是に於いて大師纔に其の志しを決したまひ。一夜更闌に人定りて後。肅然として乃父乃母の寢室に向かひ。多年愛育慈撫の劬勞を禮謝し。一掬無限の感涙を袖にし。自ら憶念したまはく。流轉三界中。恩愛不能斷。棄恩入無爲。眞實報恩者と。竟に遁れて家を出でたまへり。時に春月微雲に罩められ。花影幽徑に徘徊し。

香風脈々として。輕寒衣襟を襲ふ。既にして四明の山麓に達し。外叔良觀法眼の禪室を叩きたまふ。法眼は基房公の子師家公の弟大師が生母の兄にして。叡山の上綱。顯密の先達なり。是の時法眼驚き迎へて其の所由を問ひたまひしかば。大師具に其の志しを告げたまへり。法眼其の加冠の期近くして。補任の將に決せんとすることを思ひ。且阿兄の驚歎と親戚の愛惜とを顧慮し。深く素志の翻回を慫慂したまひしに。大師固く拒みてのたまはく。慈母逝去の時遺誡して。吾が亡き後には。必ず剃髪染衣して佛法を修行し。逝きにし父母の冥福を資け。兼ねては四生六道の業苦を救ふべしとのたまひしかば。我も亦是くの如くせんと思ひ。徒らに俗塵に交らんことを願はざれば。唯〻出家せんと思ふと。堅く執つて動きたまはざり

しかば。法眼覺えず感涙を垂れて。竟に其の入室を許したまひ。尋いて横川首楞嚴院の般若谷の千光房に留學せしめられき。其の翌建保元年大師年十四歳。四月九日。天台の座主公圓僧正に就きて薙髪し。其の明十日。公圓僧正より菩薩の大戒を稟承し比丘と爲りたまふ。此の際此の時大師の歡喜其將た幾何なりしか。座主公圓僧正は顯密無比の碩學にして。淨業持律の高德なりき。是より先師家公は大師の遁世を拒み。其の入道を許さゞりしが良觀法眼中に居て斡旋し。遂に大師の素志を達せしめられたり。蓋し佛制に父母の許さゞるものは。具戒得度することを得ず。大師の薙髪受具の荏苒したるは則ち此を以てなり。夫大師は夙に華冑に降誕し。又名門に愛育せられたまふ。其の居は金殿玉閣。其の衣は綾羅錦繡。其の

食は山珍海異。奴婢僮僕左右に奉侍し。花晨月夕遊嬉娯樂。起居動止唯其の欲する所のまゝなり。然り而して大師より之を觀じたまふときは。四大五蘊の色身。由來渺たる滄海の一粟。漠たる宇宙の蜉蝣。夢幻泡影輪廻生死するのみ。縱ひ緊那伽陵讃歎の音聲を聞くとも。夕べの風の耳を拂ふに齊しく。縱ひ王墻西施微妙の容顏を見るとも。朝の露の眼を遮るに同じ。此の日已に過ぎぬれば。命も亦隨つて減すること。少水の魚の如し。玆に何の樂しみかあらん。即ち徒らに塵俗に交らんことを思はず。唯〻出家せんことを願ふとのたまひしは。實に已に不退地に投入し。今日に至るも猶人の肺腑を聳動したまふ。是れ當日良觀をして其の鋒を折くこと能はず。又師家をして其の志を奪ふこと能はざらしめられし所以なり。釋

尊は十有九歳にして出家入道したまひ。大師は十有三歳にして出家入道したまふ。而して其の金剛不壞の信心と。其の一身の行藏取捨とは。萬古の下同軌一轍。毫も軒輊する所なし。然るに釋尊の聖德大業は。其の昭々たること杲日の天に麗くが如く。天下萬世皆之を讃歎景仰せざるものなし。知らず大師の前途は。如何なる聖德を天下に光被し。如何なる大業を萬世に樹立したまふか。

第五章　更衣及び修學

佛法の大海は漸く入れば漸く深く。漸く進めば漸く廣くして。其の廣大なることは。渺茫として遂に津涯を知るに由なく。其の甚深なることは。幽玄にして輙ち窮極を探るに由なし。

然も此の如しと雖も。人々具有の心性を除きて。別に謂はゆる佛法なるものあらざるなり。是故に三乘十二分教より一切の論釋章疏に至るまで。皆是心性の體相用を拈提して。佛知見を開示し。及び之に悟入せしむるに非ざるものなし。然れども佛法を修證するには。必ず佛法修證の眼目を具せざるべからず。謂はゆる佛法修證の眼目とは。大法選擇の識見を謂ふなり。蓋し佛祖の聖教は固より對機の演法に屬す。故に其の言詮亦千差萬別にして。曾て一定の軌轍あることなし。是法門の八萬四千に別れ。經律論の百千萬卷に過ぎ。而して公案の數百千則に至る所以なり。是を以て若し佛法修證の眼目を具せず。大法選擇の識見を有せざるときは。徒らに經典論釋の文字名相に凝滯して。終に出身の活路を得ること能はず。

即ち寶山に入り手を空くして歸り。永劫にも此の一大事因緣を究盡すること能はざるなり。我が大師學道の見地は。始終を一貫して實に此に存す。若し此の見地を知らざるときは。大師學道の行徑を測知する能はざるなり。大師千光坊に留學ましましてより。日夜山門の教觀を學び。又南天の秘教を習ひたまひ。茲に既に三回の葛裘を更て。三學兩乘の研鑽日も亦足らざるが如くして。傍又一切藏經をも閲覽したまひしに。頓て一塊の大疑團。其の胸宇の間に鬱結し來れり。大疑團とは則ち顯密の二教に於いて俱に談ずる所の。本來本法性。天然自性身の那一著なり。若し自己の身心にして。本來に法性を存在し。天然に佛身なりとせば。三世の諸佛は何の故に發心出家して。無上正等正覺を願求したまふかと。便ち之を山

門の碩學者德に歷參質義したまひしかども。遂に之が理致の指敎を受けたまふことを得ず。時に大師は偶〻三井寺の公胤僧正の觀心に明かなることを聞き。就いて之に質したまふ。公胤僧正答へて曰はく。子が疑點は我が宗堂奧の玄談にして。傳敎慈覺の兩大師より。累代口訣を以て傳承し來れり。然れども甚だ之を說くに苦しむ。遙かに聞く西天の達磨大師東土に來り。方に佛印を傳持せられしより。今其の宗風天下に布けり。名けて禪宗といふ。若し此の事を決擇せんと思はば。速かに建仁寺に赴き榮西禪師の室に入りて其の故實を尋ぬべしと。蓋し公胤僧正は亦大師の外叔にして。夙に三藏を周覽し。顯密二敎に精通し。當時佛法補處の菩薩と稱せられたる人なり。大師其の敎へを聞きて大いに悅び。徑に建仁寺に詣り榮西禪師に謁し。便ち問ひて曰はく。本來本法性。天然自性身。什麼としてか三世の諸佛は發心成道するや。禪師曰はく。三世の諸佛は有ることを知らず。狸奴白牯は却つて有ることを知ると。大師深く其の敎示を服膺したまひ。是より留りて禪師に常侍し。佛祖嫡傳の正宗に歸入して。復四明に歸りたまはず。蓋し禪師の敎示は。人々箇々。本來本法性天然自性身にして。毫も修證の階級を見るべきなく。娘生の面目他の安排を要せず。四六時中。任運騰々。日出でゝ起き日入つて息ふ。井を鑿りて飲み田を耕して食ふ。堯德舜仁吾に於いて何かあらん。然るに三世の諸佛は。此の天眞爛熳毫も工夫を要せざる所に於いて。發心修行菩提涅槃の閑家風を弄す。此を以て却つて此の事あることを知りたまはざりしも。山中

曆日なきの處林果を食ひ。溪流を飲み。逍遙自適する狸奴。春風駘蕩の天地に。梅處柳邊牧童に伴ひて。優游起臥する白牯は。迷悟昇沈の邊際を忘れ。是非得失の商量を絶するを以て。却つて此の事あることを知ると。向上の一路。千聖不傳の妙曲を開示したまひしなり。此の時建保二年大師十五歲にましましが。五百年間不世出の大聖にして。夙に佛法修證の眼目を具へ。大法選擇の識見を有したまへるが故に。禪師の教示に於て。直に敎觀の羅網を蹋翻し。天空海濶の佛地に徜徉したまふ。大師に非ずんば。如何んぞ此くの如き格外超脫の活機輪を轉じたまふことを得んや。然り而して後人若し誤りて此の一段の因緣を領解するときは。則ち毫釐の差ひ天地の懸隔と爲り。法身邊の死漢と爲らざれば。必ず自然外道

の魔黨に入るなり。佛法本より天然の釋迦なく自然の彌勒なし。修ありて證を得。證して修す。而かも是修證一如なり。修證一等なり。亦是不染汚なり。切に實參實究することを要す。榮西禪師は明菴と號し。備中の人。俗姓は賀陽といふ。幼にして聰敏。十四歲にして出家し。深く佛敎の玄理を學び。入宋して顯密の蘊奥を窮め。居ること半年にして歸朝す。然れども佛道の極致に於いて。尚慊焉する所あり。後復入宋して天台山萬年寺に詣り。臨濟第十四世虛菴懷敞禪師に參學せしが。虛菴天童に遷るに及びて亦た隨ひ往き。朝參暮請具に佛祖の大道を究盡せり。曾て千佛閣の改修を統督せしに。孝宗皇帝勅して千光大法師の號を賜へり。歸朝の後建仁寺を開創して。顯密心の三宗を宣揚し。衣法を明全和尚に傳へ。建保

三年七月五日。世壽七十五にて入寂したまふ。則ち大師十六歳の時なり。是より大師は明全和尚に師事して。日夜臨濟の宗旨を參叩し。又傍律藏を習ひ。兼ねて止觀の蘊底を究め。重ねて菩薩の大戒を受け。又谷流の祕法一百三十四尊の行法護摩等を受け。刀耕火種佛法を修證したまふこと前後九年。此の間榮西禪師の宋國より齎したまへる五千餘卷の大藏經を周覽せられしこと二回。而して大凡顯密心三宗の正脈は。悉く稟承して。明全和尚の嫡嗣と爲りたまへり。蓋し建仁の風規たる。他宗僧侶の歸投するものは。三年を經歷せざれば。更衣せしめざるを則とす。然るに獨り大師のみは掛錫の翌月特に更衣を許され。又僧伽梨衣を授けらる。其の榮西明全の兩師に器重せられしこと。前後の事蹟を以て推測すべきなり。

第六章　傳道弘教の起原

國家の盛衰興廢する所以のものは。一に民心の正邪善惡に由らずんばあらず。而して民心の正邪善惡は。一に教化の盛衰興廢に由らずんばあらず。夫教化盛んなるときは國家興隆し。教化衰ふるときは國家衰廢す。是の故に古へより聖人君子は。教化を以て經國の大本となせり。蓋し國の本は民に在り。民の本は教へに在り。教への存せざる。民依つて立つこと能はず。民立つこと能はざれば。國家焉ぞ能く獨り存立することを得ん。是を以て國家を經綸せんと欲するときは。教化を振興して庶民を率ゐるより急なるものなし。教化を度外にして。國家を經綸せんとするときは。百年河清を待つが如く。國家

は竟に經綸すべからざるなり。大師傳道の素願。大師報國の至誠は。實に此に在り。若し此の素願の在る所を知らず。又此の至誠の存する所を領ぜざれば。大師一代の身心と千古の洪業とは偕に測知すべからざるなり。然而して大師をして特に報國の至誠を凝固せしめ。特に傳道の素願を發揮せしめたるものは。則ち皇室の戚緣と當時の國勢なりとす。今皇室との戚緣を敍すれば。大師の父通親公始め後白河天皇に事へたまひしより。土御門天皇に事へたまふまで。前後七朝に互り。中に就きて高倉天皇は殊に眷顧せさせられ。尋いて天皇の御子後鳥羽天皇亦公を殊寵しまして。公の女在子を納れて中宮としたまふ。是即ち承明門院にして。土御門天皇の御生母。大師の女兄なりとす。故に天皇は大師の御外甥に渡らせ

たまふ。天皇又大師の長兄贈左大臣通宗公の女を納れて中宮としたまふ。是即ち後嵯峨天皇の御生母にして大師の姪女なりとす。又順德天皇は土御門天皇の御異母弟にて御幼少の時より。通親公其の大傅として常に補導したまひ。而して仲恭天皇は順德天皇の御子なり。大師の皇室に於かせらるる戚緣其此くの如し。此の時に當り源頼朝既に薨じ。其子頼家實朝相尋いで將軍たりしが。久しからずして又皆薨じ。而して北條義時政柄を執り。鎌倉の覇業益〻鞏く。天下の士民皆其の命に服し。朝廷は獨り虛器を擁するのみ。承久三年大師年二十二尙建仁寺に在せり。其の五月後鳥羽上皇軍を發して鎌倉を征代せしめたまひしに。義時其の子泰時に命じて。反つて闕を犯さしめたり。賊兵總べて十九萬。官軍敗績して京師陷

る。泰時輙ち父の命を聽て。仲恭天皇を廢し。後鳥羽上皇を隱岐に。土御門上皇を土佐に。順德上皇を佐渡に遷し奉れり。父子三帝各々千里の窮海に隔絶し。瘴烟毒霧の間に蒙塵して。終天復相見えたまふことを得ず。其の生別は即ち死別にして。而して皇室の命脈は朝にして夕べを測るべからず。國史ありてより以來上下殆ど三千年。未だ曾て此くの如き慘絶愴絶の事あらず。七百年後の今日を以て之を回想するに。猶流涕慟哭の至りに堪へず。況や親しく皇家の恩寵を荷ひ。前後四帝に戚緣を辱なうする大師にして。當時目前に此の慘絶愴絶の狀況を觀したまひしときは。血涙潸然として雨下し。九腸爲めに寸裂して。殆ど人事を辨ぜざるに至りたまひしことは。復言を要せざるなり。夫北條義時は無前の逆賊兇豎にして。

而して當時の習俗は絶後の險惡暴戾なりき。彼の謂はゆる諸國の守護及び莊園の地頭なるもの。假令鎌倉の選任に出づと雖も。皆王民の租稅に衣食し。王土の警護を職とす。然るに承久の役起るに及び。此の輩相率ゐて命を鎌倉に聽き。戈を四朝の天子に倒にし。恬然として愧とせず。平時は王民の租稅を以て其の兵馬を養ひ。事あれば其の兵馬を以て王室に反噬し。因て以て至當の措置となす。同氣相求め同類相應じ。魑魅魍魎白日横行し。滔々たる國家の頽勢復之を如何んともすること能はず。若し當時の事蹟をして外國にあらしめば。謂はゆる國家は已に滅亡せりと謂ふも敢て不可なかるべきなり。此際此時無限の感慨大師の胸懷に鬱勃し。益〻佛法修證の道念を皷動し。益〻濟世利生の願力を增進し。益〻國家報効の

素懐を發揮したまひしなり。蓋し當時滔々たる頽勢は。中世以還數百年の久しき。上下君臣の間に積漸したるものの暴發したるにて。之を既倒に挽回するには。區々たる權謀術策の得て能すべきに非ず。必すや雄渾壯大の眞理を擴充し。經國の大本を天下萬世に樹立して。之を匡救扶濟するに非ずんば。復之を如何んともする能はざるを以てなりき。

第七章　入宋發程

佛祖の大道を宣傳擴充して。一切衆生曠劫の業苦を救濟せんとするには。已自ら先づ佛祖の大道を成就せざるべからず。貞應二年大師年二十四になりたまひ。既に顯密の蘊底を窮極し。又臨濟の宗旨を研鑽し。傍三藏に精通したまひしと雖も。佛

祖單傳の大道なる正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門に於いては。尚未だ自證したまふと能はず。是に於ていか入宋求法の大願を發したまひ。一切の僧具を整備し。後堀川天皇の宣旨及び兩六波羅府師の關券を得て。榮西先師の塔廟に禮辭し。又佛法守護の統領なる白山明神に祈誓し。前左衛門督從三位入道木下道正。及び加藤四郎左衛門景正等を携へ。此の歳二月二十一日其の師明全和尚と俱に京師を發し。三月筑前の博多に達し。其の下旬に商舶に駕し。萬里の蒼溟に入りたまふ。船中疫厲に罹りて頗る煩悶せられたりしも。日ならずして癒え。四月初旬浙江省慶元府に着したまへり。時に南宋寧宗皇帝の嘉定十六年なり。從者道正は。太政大臣藤原爲光九世の裔にして。世々京師の木下に居り因つて氏とす。俗稱

は隆英。天資俊逸。博く經學に通じ。又詩を賦し文を善くす。門に至るもの甚だ多し。曾て從三位に叙し左衛門督に任ぜらる。治承中外祖父源仲家。平氏と戰つて之に死す。因つて世を遁れて入道し道正と稱す。大師在宋中は常に衣鉢に侍せしが。淨祖に天童に參じて鉗鎚を受け。豁然として省悟し。大師に侍して歸朝す。其の裔今尚ほ京都に在り。加藤景正は。大和の人なるが。長ずるに及びて通親公に仕へ。後五位に敍せられ。大師の入宋せらるゝに及び。命ぜられて從行し。後又大師に侍して歸朝せり。此の人別に春慶と号し。幼にして土器を造ることを好み。長ずるに及びて常に陶器の製作に志し。宋に入りて大師の許諾を得。勉勵して製陶の業を學び。歸朝の後。地を尾張の瀨戸に相して。大いに斯の業を開き。

子孫蕃殖して今に至り製陶甚だ盛んにして。四方其の給を仰ぐ。世に陶器を概稱して瀨戸物と謂ふは此に由りてなり。後世瀨戸の村民景正を追稱して陶祖と謂ひ。又祠を建て陶彥社と稱し又窯神と名け。歲時に祭祀すと云ふ。大師の慶元に著せらるゝや。尙舟中に在して。時々上陸し諸方の寺院を歷觀し。名匠碩學を討尋したまひぬ。五月四日阿育王山の典座舟に抵りて椹を購ふ。因に大師相見したまひて。數番の問話あり。典座は有道の尊宿にして大事に飽參す。大師服膺したまふ。事載て永平清規典座敎訓に在り。而して大師と典座との往復問話は。實に後學の金科玉條なり。志しあるものは必ず之を讀誦し參究すべし。蓋し當時の入宋は。大いに今日の航歐渡米と事情を異にし。粗造の木船に駕し。風に隨つて帆を

揚け。潮を追ひて艣を操り。動もすれば則ち一回の航路に數月の日子を費やし。既に其地に著すとも。彼此の間固より訂盟の條約あるに非ず。公使領事の駐劄あるに非ず。同胞兄弟の居留あるに非ず。而して風土氣候同きに非ず。言語應對同きに非ず。人情風俗同きに非ず。衣食居住同きに非ず。其苦辛艱難は。實に今日の吾等が測知する所に非ざるなり。然り而して佛祖の大道を成就したまふには。此の苦辛艱難よりも。更に幾百千萬の苦辛艱難ありしことを知らざるべからず。

第八章　天童の掛錫及び僧臘の釐正

此の年五月十三日。大師初めて浙江省慶元府太白山天童景德寺に詣り。無際了派禪師に謁せしに。禪師一見して深く器重し提撕甚だ殷勤なり。因つて其輪下に止住したまふ。天童山は宋朝五山の一刹にして。厚く朝廷の外護を受け。香積の資財甚だ豐饒にして衆徒常に千人に下らず。而して無際禪師は當時の宗匠なれば。明全和尚も亦禪師に參じて。大師と俱に掛錫せられたり。蓋し大師及び明全和尚の天童に登りたまひしは。先師榮西禪師の昔日茲に留錫したまひし舊蹤を追ひたまひしなり。時に大師は年二十四。明全和尚は年四十なり。此の時綱維は二人を新戒の位次に排列せり。其の意遠方邊國の人といふを以て。之を輕賤侮蔑したるなり。凡そ禪林の常軌に。一會衆僧の僧籍なるものあり。則ち受戒先後の年臘に依りて。其の階級位次を設定し。坐作進退の序列を制するものにて。是を僧臘戒次と謂ふ。即ち佛祖の洪範なり。大師之

を見て其の非法を慨きたまひ。竊に綱維に忠言して之を改めしむるも。聽かず。是に於いて大師は其の佛祖の洪範に反することを明示し。屢〻之が矯正を慫慂したまひしに。一山の者宿皆之を拒み。且日はく。唐朝以還日本より來れる所の最澄空海乃至榮西等も。中華の叢林に入るときは皆必ず新戒に列せり。是中華叢林の例規なり。是を以て今や遽に之を改め難しと。爰に於いて大師竊に佛祖洪範の紊亂するを痛歎したまひ。必ず之を矯正せんと欲し。乃ち之を寧宗皇帝に訴へたまふ。其の上表の畧に曰はく。佛西天に興りて。毘尼を以て洪範と爲ず。法東域に流れて。僧臘を序じ階差を分つ。前古依り繇ふ。今に至りて何ぞ廢せん。伏して以れば。皇朝聖詰にして宸慈溥通す。靈山の囑言を忘れずして。漢廷の奉行を

慕ふことを願ふ。恩を垂れて僧次を質したまはば。受戒の先後愆りなからん。旨を頒ちて亂階を治めたまはば。法歲の短長以て別つべし。外客幸に天澤に沐し。下情野詞を悉さずと。此の表一たび上りたまひしも。朝議因循して。勅裁未だ下らず。是に於いてか大師再び上表したまへり。其の畧に曰はく。重ねて白す。佛法沙界に徧くして。戒光十方を照らす。況や經に曰はく。今此の三界は。皆是我が有なり。其の中の衆生は。皆是吾が子なりと。皆是我が有を以て言ふときは。此の娑婆世界は釋迦牟尼佛の國土なり。國已に佛國なれば人皆佛子なり。兄弟は天倫にして混淆すべからず。伏して以れば。佛法世法理のままに之從ふ。天神地祇は非理を容さず。理にして或は達せざるときは。恐らくは是亂邦ならん。賢者は亂

邦に居らず。眞人は奸慝を避く。佛家の臘次にして。若し的當ならずんば。王室の憲綱は。安ぞ明晰とせんや。幸に中華の聖德を仰ぎ。爰に倭僧の鄙懷を陳ぶ。天裁胡ぞ私あらん。謹みて乞ふ戒次を正したまへと。寧宗皇帝親ら其の表を覽て。大いに之に感動し。遂に天童山に勅して。如法に僧臘の序次を格定せしめたり。天童多年僧臘亂次の弊。是に於いてか矯正することを得。而して諸方の叢林も。風を聞きて僧臘の亂弊を釐正し。爭ふて佛祖の洪範に復したり。是より後は本朝の僧侶漢土に入りて。諸方の叢林に掛錫するときは。皆法臘に依りて階次せられ。復枉屈せらるゝことなし。蓋し大師の風采たる溫厚恭謙。小心細思幾に入り微に透る。然り而して事に臨み機に應ぜらるゝや。莫斷果決にして。勇往邁進敢て

屈撓せず。是を以て其の戒臘の亂次を爭ひたまふや。眼中天童山なく。又朝廷なし。千古の下威風凛々。人をして寒毛卓立せしむ。而して兩回の表文を拜讀するに。一意專心法を重んじ道を重んじ。毫も人我の見を容れたまはず。以て外國の朝廷を反省せしめ。以て僧臘の濫弊を矯正せしめたまへり。大師脚跟僅に宋土を履みたまひて。早く既に四百州の世出世間を聳動したまふ。其の一擧一動既に此くの如し。以て他日の施設を卜すべきなり。是の月曇の阿育王山の典座。大師の天童に在すを知り。特に登山して大師に相見し。祖道の玄機を敲唱して去る。大師之を明全和尚に告げたまひしに。和尚大いに歡喜したまひしと云ふ。此の事亦載せて永平清規典座教訓に在り。斯く育王の典座が大師の天童に在すを知りしは。

嚮の僧臘釐正の偉擧の。阿育王山に傳聞したるに依るなるべし。阿育王山は天童山を距ること僅に三十里許なればなり。

第九章　秘寶の拜覽及び靈夢の感得

大師天童の僧堂に在して。日夜參禪學道に勉勵したまひ。其一大事因緣なる。佛祖の大道を成就する爲め。暫時も放過せられずして。四六時中恰も怨讐と同居したまふが如し。此の秋日本の僧隆禪上座なるものあり。其の道友良傳藏主に請ひて。龍門佛眼派下の嗣書を大師に拜覽せしめたり。隆禪上座は藤原定家の甥なるが。大師に先ちて入宋し。天童に留錫せるものなり。蓋し嗣書とは。敎主釋迦牟尼佛より印度二十八祖乃至支那六祖を經て。吾人に至るまで。佛祖單傳の大道相

承を詮顯する寶券靈譜にして。實に是れ從上佛祖の暖皮肉活骨髓なり。佛祖門下に於ける最尊最貴の秘寶は之に過ぎたるものなし。是の故に各自に之を珍襲藏して。決して他に示さゞるものとす。然るを大師此の時始めて拜覽して。難値難遇の感涙を濺ぎたまひ。其の後惟一西堂に依りて。法眼下の嗣書を拜し。又宗月長老に依りて。雲門下の嗣書を拜したまふ。又其の翌嘉定十七年正月二十一日には。堂頭無際禪師が其の師阿育王山の佛照德光禪師より授りたる嗣書を拜覽したまひて。又難値難遇の感涙を濺ぎたまへり。大師嗣書拜覽の因緣は。總べて其の垂訓なる正法眼藏嗣書の卷に詳なり。而して佛祖門下に於いて嗣書の最尊最貴なることは。大師の垂訓に依りても。其の一斑を窺ふべきなり。則ち無際禪師珍襲

秘藏の嗣書を拜覽せられしときの事緣を示したまひて曰はく。

これは阿育王山佛照禪師德光。かきて派無際にあたふるを。天童の住持なりしとき。小師の僧智庾ひそかにもちきたりて。了然寮にて道元にみせき。ときに大宋嘉定十七年甲申正月二十一日。はじめてこれをみる。喜感いくぞばくぞ。すなはち佛祖の冥感なり。燒香禮拜して披看す。この嗣書を請出することは。去年七月のころ。師廣都寺ひそかに寂光堂にて道元にかたれり。道元ちなみに都寺にとふ。如今たれ人かこれを帶持せる。都寺いはく。堂頭老漢那裏有相似。のちに請出ねんごろにせば。さだめてみすることあらん。道元このことばをきゝしより。もとむるこゝろざし日夜に休せず。このゆゑに。今年ねんごろに小師の僧智庾を

屈請し。一片心をなげて請得せしなり。そのかける地は。白絹の表背せるにかく。表紙はあかき錦なり。軸は玉なり。長九寸ばかり。濶七尺餘なり。閑人にはみせず。道元すなはち智庾を謝す。さらに即時に堂頭に參して。燒香禮謝無際和尚。ときに無際云、這一段事少得見知。如今老兄知得。便是學道之實歸也。ときに道元喜感無勝。

此の全文は載せて正法眼藏嗣書の卷に在り。然れども正法眼藏は大師の皮肉骨髓にして。實に宗門室內の秘寶なり。而して嗣書の如きは。固より之を公に示すべきに非ざれば今茲に載錄すること能はざるなり。大師の垂訓に於て。師廣都寺の言に堂頭老漢那裏有相似とは。堂頭無際禪師は。佛祖單傳の大法を嗣承すとの謂ひなり。都寺とは禪林六知事の上首にし

て。寺務を都管する職なり。小師智庾は。顧に無際禪師の弟子にして常に其の左右に侍する行者なるべし。小師は梵語に鐸曷羅と謂ふ。受戒して未だ十夏に滿たざるものの稱なり。其翌寶慶元年大師天台山雁山寺に遍參したまへる途次。平田の萬年寺を訪ひ。元鼎和尚に見えて。又嗣書を拜覽したまひき。是より先元鼎和尚靈夢を感ずることありしかば。大いに大師を尊敬せしが。其の後大師も亦靈夢を感じ。此の嗣書拜覽の因緣に感激したまへり。此の事又正法眼藏嗣書の卷に於いて懇切に垂訓したまひて曰はく。

のちに寶慶のころ。道元台山雁山寺に雲遊するついでに。平田の萬年寺にいたる。ときの住持は福州の元鼎和尚なり。宗鑒長老退院ののち。鼎和尚補す。叢席を一興せり。人事

のついでに。むかしよりの佛祖の家風往來せしむるに。大潙仰山の令嗣話を擧するに。長老云曾看我箇裏嗣書也否。道元云。いかにしてかみることを得んと。長老すなはちみづからたちて。嗣書をさゝげていはく。這箇はたとひ親人なりといへども。たとひ侍僧のとしを經たるものといへども。これをみせしめず。これすなはち佛祖の法訓なり。しかあれども。元鼎ひごろ出城し。見知府の爲めに在城のとき。一夢を感ずるにいはく。大梅山法常禪師とおぼしき高僧ありて。梅花の一枝をさしあげていはく。もしすでに船舷をこゆる實人あらんには。花をおしむことなかれといひて。梅花をわれにあたふ。元鼎おぼえずして。夢中に吟じていはく。未跨船舷好與三十棒。しかあるに不經五日與老

兄相見。いはんや老兄すでに船舷跨來。この嗣書また梅花の綾にかけり。大梅のおしふるところならん。夢中と符合するゆゑに。とりいだすなり。老兄もしわれに嗣法せんともとむや。たとひもとむとも。をしむべきにあらず。道元信感おくところなし。嗣書を請すべしといへども。たゞ燒香禮拜して。恭敬供養するのみなり。ときに燒香侍者法寧といふあり。はじめて嗣書をみるといひき。道元ひそかに思惟しき。この一段の事。まことに佛祖の冥資にあらざれば。見聞なほかたし。邊地の愚人として。なんのさいはひありてか。數番これをみる。感涙霑袖。ときに維摩室大舍堂等に閑聞無人なり。この嗣書は落地梅の綾のしろきにかけり。長九寸餘。濶一尋餘なり。軸子は黃玉なり。表紙は

錦なり。道元台山より天童にかへる路程に。大梅山護聖寺の旦過に宿するに。大梅祖師來り。開花せる一枝の梅花をさづくる靈夢を感ず。祖鑒もとも仰憑するものなり。その一枝花の蹤横は。一尺餘なり。梅花豈優曇華にあらざらんや。夢中と覺中と。おなじく眞實なるへし。道元在宋のあいだ。歸國より後。いまだ人にかたらず。

此の後大師は。佛祖單傳の大道を天童如淨禪師に嗣承し。此の室內秘寶の嗣書を拜受したまへり。其の嗣書今現に永平寺の寶庫に秘藏す。抑〻大法嗣承は。佛祖門下に於いて至大至重の要機にして。而して之を證憑するものを嗣書と爲す。若し佛祖門下に嗣書なきときは。大法の嗣承は之を證憑するに由なきなり。故に曰はく佛祖門下の嗣書は。佛祖單傳の大道

相承を詮顯する寶券靈譜にして。實に是從上佛祖の暖皮肉活骨髓なり。最尊最貴の秘寶之に過ぎたるものなしと。大師にして若し從上の因緣に感應道交し。之を我が日本に傳承したまふことなくんば。佛祖の法壽慧命如何んぞ之を今日に相續し來ることを得んや。而して我が大師の大法を嗣承相續する法子法孫が。其の嗣書を調製するに當り。落地梅綾の白きを用ひ。今日に至るも之を變更せざるは。蓋し大梅法常禪師の靈夢及び元鼐和尚の嗣書之が濫觴を爲すに由れり。然り而して大師は深く梅華を賞翫せられ。此の後機に對し緣に應じて。梅華を拈提したまひしこと。其の幾回なることを知らず。事皆載て正法眼藏又は其の語錄の中にあり。是其の本は曩祖達磨大師の一華開五葉。結果自然成と唱へられたるに淵源すべ

けれども。或は又大梅法常禪師の靈夢を私淑したまひしに依らざるを得んや。元鼐和尚の夢は大師の夢と雙方相符し。元鼐和尚は夢に依つて大師に室內の秘寶を示し。大師は夢に依つて大法の嗣承を懸記したまふが如し。其の祖鑒もとも仰憑するものなりとのたまひ。梅華豈優曇華にあらざらんやとのたまひ。又夢中と覺中とおなじく眞實なるべしとのたまひしを見れば。此の間の消息豈窺ふべからずとせんや。殊に大師道業の牢實なることは。大梅禪師と同揆にして。高風逸格。縹致を歲寒の梅花と俱にし。他の凡桃俗李と艶陽に爭ひたまはず。然るに其の德香の芬々として天下に薰徹するや。其の法子法孫一は朝鮮の全土に蔓延して法雨を八道に澍ぎ。一は日本の山河に蕃衍して敎旆を四海に飜す。千古の下大梅と大

師と實に雙絶と稱すべきなり。而して大梅法常禪師の事蹟は。各種の傳燈に詳なるも。今は正法眼藏行持の卷に。大師親ら叙したまひし所を錄して。靈夢の因緣を悉すべきの資料に供ぜんと欲す。請ふ蛇足を添ふるを咎むること勿かれ。

大梅山は慶元府にあり。この山に護聖寺を草創す。法常禪師その本元なり。禪師は襄陽の人なり。かつて馬祖の會に參してとふ。如何是佛と。馬祖云即心是佛と。法常このことばをきゝて。言下に大悟す。因みに大梅山の絶頂にのぼりて。人倫に不群なり。草庵に獨居す。松實を食し荷葉を衣とす。かの山に小池あり。池に荷おほし。坐禪辨道すること三十餘年なり。人事たえて見聞せず。年曆おほよそおぼえず。四山青又黃のみをみる。おもひやるには。あはれ

むべき風霜なり。師の坐禪には八寸の鐵塔一基を頂上に置く。如戴寶冠なり。この塔を落地却せしめざらんと功夫すれば。ねふらざるなり。その塔いま本山にあり。庫下に交割す。かくのごとく辨道すること。死に至りて懈倦なし。かくのごとくして年月を經歷するに。鹽官の會より一僧きたりて。山にいりて拄杖をもとむるちなみに。迷山路して。はからざるに師の菴所にいたる。不期のなかに師をみる。すなはちとふ。和尚この山に住してよりこのかた。多少時也。師いはく。只見四山青又黃。この僧またとふ。出山路向什麼處去。師いはく。隨流去。この僧あやしむこゝろあり。かへりて鹽官に擧似するに。鹽官いはく。そのかみ江西（法常禪師の本師なる馬祖大師の止住したまひし所）に

ありしとき。一僧を曾見す。それよりのち消息をしらず。莫是此僧否。ついに僧に命じて師を請するに出山せず。偈を作りて答ふるにいはく。摧殘枯木倚寒林。幾度逢春不變心。樵客遇之猶不顧。郢人那得苦追尋。ついにおもむかず。これよりのちなほ山奥へいらんとせしちなみに。有頌するにいはく。一池荷葉衣無盡。數樹松花食有餘。剛被世人知住所。更移茅舍入深居。つひに菴を山奥にうつす。あるとき。馬祖ことさら僧をつかはしてとはしむ。和尚そのかみ馬祖に參見せしに。得何道理便住此山なる。師いはく。馬祖われにむかひていふ即心是佛と。すなはちこの山に住す。僧いはく。近日佛法また別なり。師いはく。作麼生か別なる。僧いはく。馬祖いはく非心非佛とあり。師いはく。這

老漢ひとを惑亂すること。了期あるべからず。任他非心非佛。我祇管即心是佛。この道をもちて馬祖に擧似す。馬祖云。梅子熟也。この因緣は。人天みなしれるところなり。天龍は師の神足なり。俱胝は師の法孫なり。高麗の迦智は師の法を傳持して。本國の初祖なり。いま高麗の諸師は。師の遠孫なり。生前には一虎一象よのつねに給侍す。あひあらそはず。師の圓寂の後。虎象石をはこび泥をはこびて。師の塔をつくる。その塔いま護聖寺に現在せり。

第十章　袈裟及び鉢盂に就きての感慨

袈裟は是佛祖の頂顎眼睛なり。皮肉骨髓なり。鉢盂は是佛祖の皮肉骨髓なり。頂顎眼睛なり。袈裟鉢盂即ち佛祖なり。佛

祖即ち袈裟鉢盂なり。大師天童の僧堂に在して。鄰單の僧衆の毎朝袈裟を頂戴して被奉するを視たまひ。始めて佛祖屋裏の袈裟を搭くる法を知り。感涙袖を霑して。心竊に大願を發したまひき。又三韓の僧二人。當時來りて天童に掛錫せしに。佛祖の弟子として當に具足すべき。鉢盂並びに袈裟を携帶せず。又鉢盂及び袈裟の故實を知らざるを見て。愈〻自ら慚愧し深く自ら戒めたまふ所ありき。大師の參禪辨道に於いて。時々刻々に機に對し緣に觸れて。暫時も放過したまはざりしこと。是を以て其の他を推知すべきなり。蓋し末法の今日。大師曠劫の願力に依りて。此の袈裟を傳へ。此の鉢盂を授かり。又袈裟の貴きことを知り。又鉢盂の貴きことを知り。其の鉢盂に依りて飢渴を免れ。其の袈裟に依りて寒暑を凌ぎ。

共に是今日に至るまで受用不盡なり。則ち此の袈裟及び鉢盂に依りて。我等と衆生と共に佛道を成じ。此の鉢盂及び袈裟に依りて。衆生と佛祖と同道唱和す。大師の流德餘澤に沐浴するもの。當に如何んしてか報恩謝德の道を盡すべきか。大師正法眼藏傳衣の卷に垂訓したまひて曰はく。

予在宋のそのかみ長連牀に功夫せしとき。齊肩の鄰單をみるに。毎曉の開靜のとき。袈裟をさゝげて頂上に安置し。合掌恭敬して一偈を默誦す。時に予未曾見のおもひを生じ。歡喜身にあまり。感涙ひそかにおちて衣襟をうるほす。その旨趣は。そのかみ阿含經を披閲せしとき。頂戴袈裟の文をみるといへども。その儀則いまだあきらめず。いまのあたりみる。歡喜隨喜し。ひそかにおもはく。あはれむべし

郷土にありしには。をしふる師匠なし。かたる善友にあはず。いくばくかいたづらにすぐる光陰をおしまざる。かなしまざらめやは。いまの見聞するところ。宿善よろこぶべし。もしいたづらに郷間にあらば。いかでかまさしく佛衣を相承着用せる僧寶に鄰肩することをえん。悲喜ひとかたならず。感涙千萬行。ときにひそかに願す。いかにしてかわれ不肖なりといふとも。佛法の嫡嗣となり。正法を正傳して。郷土の衆生をあはれむに。佛祖正傳の衣法を見聞せしめん。かのときの發願いまむなしからず。袈裟を受持せる在家出家の菩薩おほし。歡喜するところなり。受持袈裟のともがら。かならず日夜に頂戴すべし。殊勝最勝の功德なるべし。一句一偈を見聞することは。若樹若石の因緣

もあるべし。袈裟正傳の功德は十方に難遇ならん。大宋嘉定十六年癸未冬十月中。三韓の僧二人ありて。慶元府にきたれり。一人は智玄となづけ。一人は景雲といふ。この二人ともにまきりに佛經の義を談ず。あまつさへ文學の士なり。しかあれども袈裟なし鉢盂なし俗人のごとし。あはれむべし。比丘の形なりといへども比丘法なきこと。小國邊地のしかあらしむるならむ。我朝比丘形のともがら。他國にゆかんとき。またかの二僧のごとくならん。釋迦牟尼佛十二年中頂戴して。さしおきましまさゞるなり。すでに遠孫なりこれを學すべし。いたづらに名利のために天を拜し神を拜し王を拜し臣を拜する頂門を。いま佛衣頂戴に回向せん。よろこぶべき大慶なり。

然り而して袈裟の體色量。及び袈裟を搭くる法。袈裟を浣ふ法。袈裟に於ける無量の功德等は。大師正法眼藏袈裟功德の卷。傳衣の卷。及ひ永平清規辨道法等に反覆垂訓したまひ。又鉢盂を用ふる法は。永平清規赴粥飯法に丁寧遺誨したまひ。其の甚深不可思議の功德妙用は。正法眼藏鉢盂の卷に悃切教示したまへり。大師の流德餘澤に沐浴する道俗は。必ず就きて拜讀し信受し奉行し奉るべきなり。庶幾はくは佛祖に見え奉り。俱に佛祖の大道を成就することを得ん。

第十一章　叢林の遍歷及び異僧の邂逅

嘉定十七年大師年二十五。日本の元仁元年なり。天童の留錫既に二歲。是より先。屢〻無際禪師の印可を得たまひしと雖

も大師自ら之を肯ひたまはず。此の秋錫を轉じて徑山に詣り。浙翁如琰禪師に參見したまふ。徑山は宋朝五山の上刹にして。杭州臨安府に在り。興聖萬壽禪寺と稱す。如琰禪師は。天童の無際と嗣法の兄弟なり。亦明眼の宗師と稱す。琰大師を一見して問て曰はく。幾時か此間に到る。大師答へて曰はく客歲四月。琰曰はく群に隨ひて恁麼にし來るや。大師曰はく群に隨はず恁麼にし來る時作麼生。琰曰はく也是群に隨ひて恁麼にし來る。大師曰はく既に是群に隨ひて恁麼にし來る。作麼生か是ならん。琰一掌して曰はく者の多口の阿師。大師曰はく多口の阿師は即ち無きにしもあらず。作麼生か是ならむ。琰曰はく且く座して茶を喫せよ。大師如琰と機々相契はず。去つて台州に至り。盤山思卓禪師を小翠巖に訪はれ。即ち問

ひて曰はく如何なるか是佛。卓曰はく殿裏底。大師曰はく既に是殿裏底。甚としてか河沙に遍き。卓曰はく河沙に遍し。大師曰はく話墮了す。大師思卓と又機々相契はず。爾來諸方の名山巨刹を遍歷し。碩德耆老を參叩したまふ。天台の雁山。平田の萬年。慶元の護聖等を歷訪したまひしも。此の際の事なり。又阿育王山に到り大光和尚に參じたまひしが。之を肯ひたまはず。且其の門下にも人なきを歎きたまひき。大師は斯く諸方の叢林を歷參したまひしも。謂はゆる碩德耆老なるもの。箇々阿魏々地。頭腦相似て。復師事すべきものなし。依つて再び天童に詣り無際禪師に師事せんと欲せしに。偶〻禪師の遷寂せしを聞き。大いに嗟嘆したまひ。宋土淹留の爲す所なきを悟り。竊に歸朝の志しを決し。將に天童に至

り明全和尚に告別したまはんとて。途中徑山に登り。羅漢堂を拜せんとせられしに。忽ち一老僧あり。風采神異。眼光人を射る。大師に告げて曰はく。老兄萬里遠く來り。切に大法を求む。撥草瞻風所得なきには非ず。然れども人天の導師一代の宗匠は。長翁如淨其の人なり。頃日勅請に應じて。天童に晋院せられき。老兄若し初志を償はんと欲せば。當に往いて之に參ずべしと。大師之を聞き大いに歡喜作禮し。其の名を問ひたまへば。曰はく予は此間に住する老璡なりと。言ひ訖つて見えず。蓋し此の異僧は羅漢尊者の化現なりといふ。嗟乎此の一段の因緣は。實に佛祖の大道なる無上正等正覺の我が國に傳承する關鑰なり。若し異僧の大師を啓導することあらずんば。大師は遂に淨祖に親參したまふこと能はざるべ

し。大師にして若し淨祖に親參したまふことあらずんば。佛祖單傳の大道なる無上正等正覺を成就したまふに由なきなり。若し大師にして之を成就したまふことなきときは。佛祖單傳の大道なる無上正等正覺は。如何にして我が日本に傳承することを得んや。然れども諸佛諸菩薩諸天諸神は。常に我が大師を擁護して。暫くも其の左右を離れたまはず。如何んぞ五百年間不世出なる大法宣傳の至聖をして。其の所願を成就せしめざらんや。

第十二章　淨祖に相見

寶慶元年大師年二十六。日本の嘉祿元年なり。五月一日再び太白山天童景德禪寺に掛錫し。初めて長翁如淨禪師を妙高臺

に燒香禮拜したまふ。淨祖初めて大師を見たまふ。淨祖指授面授するに曰はく。佛々祖々面授の法門現成せりと。大師乃ち狀を上りて曰はく。「道元幼年にして菩提心を發し。本國に在りて道を諸師に訪ひ。聊因果の所由を識る。然も是くの如くなりと雖も。未だ佛法僧の實歸を明らめず。徒らに名相の懷慓に滯れり。後千光禪師の室に入りて。初めて臨濟の宗風を聞き。今全法師に隨ひて炎宋に入る。航海萬里幻身を波濤に任せ。遂に和尚の法席に投ずることを得たり。蓋し是宿福の慶幸なり。和尚大慈大悲。外國遠方の小人。願ふ所は時候に拘らず威儀を具へず。頻々に方丈に上りて。愚懷を拜問せんと欲す。生死事大。無常迅速。時は人を待たず。聖を去りて必ず悔ゆ。本師堂上大和尚大禪師。大慈大悲哀愍して道元

が道を問ひ法を問ふことを聽許したまへ。伏して冀はくは慈照せんことを。小師道元百拜叩頭上覆」と。淨祖此の狀を見て示して曰はく。元子が參問今より已後。晝夜と時候とに拘らず。著衣衩衣。而かも方丈に來りて。道を問ふに妨げなし。老僧は親父の子の無禮を恕するに一如すと。而して禮待殊に渥く。慈愛甚だ至る。師資の親密なること。恰も宿契あるが如し。時に知客宗端傍に侍し。淨祖に問ひて曰はく。新到甚の長所ありてか。和尚の爲めに眷顧せらるゝこと是くの如くなるやと。淨祖曰はく。昨夜洞山悟本大師を迎ふを夢みたり。恐らくは是此の子は大師の再生ならん。他日我が宗他に依りて大に世に興んと。蓋し洞山悟本大師は。釋迦牟尼佛第三十九世の正嫡。達磨大師第十一世の法孫にして。支那に於ける

我が宗中興の祖師なりとす。是より先。大師の未だ淨祖に見えたまはざるや。諸方叢林の碩學者宿。一も師事するに足るものなく。僅に無際禪師のみは稍事ふべかりしが。始めて淨祖に謁したまふに及び。直ちに師資の禮を執りて恭敬し歸仰したまひ。淨祖の始めて大師を見たまふや。亦器重し慈愛して。情誼の密なること父子に同じ。誠に是宿世の神契に出でたるものとす。而して淨祖の大師を一見して。佛々祖々面授の法門現成せりとのたまひたるは。其の旨甚深にして。恰も釋尊の多子塔前に善來迦葉とのまたひ。迦葉尊者に其の半座を分たれしが如し。當に知るべし佛々祖々の行履は。唯佛與佛乃能究盡にして。餘人の窺ひ知る所に非ざることを。然り而して淨祖の悟本大師奉迎の靈夢は。啻に契驗ありしのみな

らず。又其の知客宗端に示して。他日我が宗他に依つて大いに世に興んとのたまひしは。亦實に龜照の神識なりき。唯佛與佛乃能究盡底の天機。淨祖或は之を覆藏するに由なきには非ざりしか。此の佛々祖々面授の機要は。大師の正法眼藏面授の卷に委しく垂誨したまへり。實に後世兒孫肘後の寶符なりとす。且大師の兒孫室內傳法の時に。師資面授の禮拜を爲すは。固より佛祖屋裏の玄機なりと雖も。亦此の因緣に濫觴するなり。那箇か是佛々祖々面授の法門。池を鑿りて月を待たず池成りて月自ら來る。那箇か是唯佛與佛究盡の端的。水緣にして鳥逾〻白く。山靑して花燃えんと欲す。

第十三章　明全和尙遷化及び舍利の相傳

大師再び天童に掛錫したもふや。直に明全和尙を了然齋に省覲し。人事を爲したる因みに。客秋別離後に於ける。諸方參叩の狀趣を語りたまひければ。和尙悲喜交〻臻り。暫しは感涙に咽びたまひき。既にして和尙疾に罹り四大漸く不調なるを以て。大師日夜に看護したまひ。藥石至らざる所なかりしも療養その効なく。遂に遷寂したまふ。世壽四十三年。時に寶慶元年五月二十七日なり。大師深く悲哀したまひ。其の二十九日に闍維して舍利を收め。弔禮懇に至る。他日大師其の舍利を奉持し。歸朝の後之を榮西先師の廟側に瘞藏したまふと云ふ。抑〻大師の明全和尙に於けるや。十有六歲より二十四歲に至るまで。其の敎育薰陶を受け。師資の誼。父子も及ばずして。天涯萬里宋國に伴遊し。遂に客土に別れたまふ。

大師當時の悲感其將た幾ばくぞ。大師歸朝の後。和尚の舍利を其の遺弟に分ちたまひ。且其の記文に由りて。和尚一世の道業と。大師敬慕の情致とは。稍其の全豹を窺ふことを得るなり。仍つて左に之を錄す。蓋し明全和尚は大師授業の恩師にして。教養鞠育の勞。夐に公圓榮西兩師の右に出づ。百世の下大師法乳の慈恩に浴するものは。和尚の恩德を感謝せざるべからず。

舍利相傳記

ひそかにおもむみれば。知見のおこるきは圓音いろをあらはし。覺了のきはむるところ動容あとをとめず。こゝに圓寂の先師は伊州の人。俗姓は蘇氏。法名は明全なり。八歳にして親をはなれ。叡山にのぼりすむ。十六にして僧となり。學海をわたりゆく。あまねく顯密の奥旨をあきらめ。ひろく定慧の深際をきはむ。しかはあれども。なほこれいさごをかぞふるのりを。まぬかれざることをかへりみて。つゐにすなはち建仁寺開山前權僧正榮西禪師にしたがひて。教のほかのむねをしり。言のしたのみちをあきらめて。迦葉が靈山ににたり。なんぞ懷讓の曹谿にいたりしにことならむ。正脈たゞちに通じ。單傳ひとりあり。こゝに貞應二年みづのとのひつじ二月二十一日。建仁寺をはなれて。はるかに大宋國にをもむく。五月十三日に慶元府太白名山天童景德禪寺にいたる。このところに錫をとゞむるゆゑは。このみきり。かの本師千光の舊遊なればなり。もて歳華をおくりやゝ功夫をつむ。しかるに道たかく德つもるほど。

名やうやく兩浙にながれ。ほまれひそかに九州におよばむとするとき。大宋國寶慶元年五月十八日たちまちに微疾をうけ。おなじき二十七日たつのとき。衣裳をたゞしくし。身躰をまさしくして。端坐して寂にいる。こゝに寺門くものごとくあつまりて禮拜し。人家かすみのごとくきたりて稽首す。供養の儀式おはりて。をなじき二十九日たつのとき闍維するに。火のいろ五色にかはる。衆これをあやしみていはく。かならず舍利現ずべし。ことばのごとく闍維のところをみるに。白色の舍利三顆をえたり。これを寺につぐるに。寺の大衆みなこぞりてうやまひたとび。供養し恭敬す。そののち蓮及してひろうに。あつめて參陌陸拾餘顆をえたり。こゝに大宋國のうちいづれのところも。みなこれをきゝうやまはずといふとなし。遠近親疎みなこと〳〵くほめほむ。つゐに寺に碑をたてゝのちにつたえんとしき。をほよそ我この日本國は。佛法まさしくつたはれてのち。六百餘歳にならむとす。しかれどもまさしくその闍維ののち。舍利をとゞむることは。いまだむかしにもきかざるところ也。こゝに洛陽の智□は。すなはち先師剃度のそのひとつなり。戀慕こゝろふかし。渴仰それゆるからむや。ねんごろに一身を請す。つゐにもて處分す。そのこゝろは。たゞ今生値遇の縁あさからざることをしたうのみにあらず。當來化導のまことかならずたがはざるべしとなり。いさゝか年月を記して。のちにしらしめむとす

ときに嘉祿三年十月五日　門人道元　記

第十三章　明全和尚遷化及び舍利の相傳

此の記は大師の眞蹟にして。舊加州侯前田家の秘寶なりしが。維新の後に世に出でたり。實に趙璧とも謂ふべし。但文中一字磨滅して判讀すべからず。誠に惜しむべし。而して明全和尚示寂の後。七十余日を經て臨安府の都稅務處樗。榮西禪師の祠堂の記を製せり。之を大師の記文に對照するときは。其の事蹟彼此相符し。七百年後の今日に於いて之を掌に見るが如し。茲に抄錄して考據の一端に資す。

大日本國千光法師祠堂記

大白名山甲天下。而千佛閣尤爲第一。後世欲過之。其材無及焉。蓋柱楯絲日本國千光法師所致也。(中畧) 後十年明全復來山中。捐楮券千緡。寄諸庫轉息。爲七月五日忌。設齋飯衆本孝也。全生伊州蘇姓。傳師之道。致戒亦精。入山三年。示寂於了然齋。火後得堅固子無數。付道元藏歸故國。併刻于祠。

大宋寶慶元年八月九日

修戢郎監臨安府都稅務　處樗　記

第十四章　大師の請問淨祖の垂訓

人間の如來は人間に同じて此の世に出現ましますを以て。容易に如來の實躰を窺ひ知るべからず。況や大師の化儀たる。夐に格量の表に超脫し。凡見庸識の得て端倪する所に非ず。然れども其の佛法修證の消息を觀察するときは。或は之が九牛の一毛を髣髴することを得ざるに非ず。大師或る時淨祖に問ひて曰はく。諸方に今教外別傳と稱して。而して祖師西來

の大意を看るとす。其の意如何ん。淨祖示して曰はく。佛祖の大道何ぞ內外に拘らん。然るに敎外別傳と稱することは。唯摩騰等の所傳の外に。祖師西より來り親しく震旦に到りて。道を傳へ業を授く。故に敎外別傳と謂ふなり。世界に二つの佛法あるべからざるなり。祖師未だ東土に來らざる先に。東土に行李のみありて。而して未だ主あらず。祖師既に東土に到る。譬へば民の王を得るが如し。其の時に當りて國土國寶皆王に屬するなりと。又或る時大師問ひて曰はく。佛々祖々の大道は。一隅に拘るべからず。何ぞ强ひて禪宗と稱するやと。淨祖示しは曰はく。佛祖の大道を以て。猥りに禪宗と稱すべからず。今禪宗と稱するは。頗る是澆運の妄稱なり。禿髮の小畜生の稱し來る所なり。往古の知る所なり。爾曾て石門の

林間錄を看しや。曰はく未だ曾て錄を看ず。曰はく爾看ること一遍せば好し。彼の錄に說き得て是なり。大凡世尊の大法は。摩訶迦葉に單傳して。嫡々相承すること二十八世。東土五傳して曹谿に至り。乃至今日如淨は則ち佛法の總府なり。大千沙界更に肩を齊しくすべきものなし。今三五本の經論を講じ得て。以て各々の宗風を扇ぐ徒は。乃ち佛祖の眷屬なり。眷屬にして內外親疎高低あるなりと。(石門林間錄は。宋の覺範慧洪の著す所なり。錄に曰はく。菩提達磨初自梁之魏。經行於嵩山下。倚杖於少林。面壁燕坐而已。非習禪也。久之。人莫測其故。因以達磨爲習禪。夫禪那諸行之一耳。何足以盡聖人。而當時爲史者。又從而傳茲習禪之列。使與枯木死灰之徒爲伍。雖然。聖人非止於禪那。而亦不違禪那。如易出乎陰

陽。而亦不違乎陰陽。）大師拜覆して曰はく。諸方の長老等の說く所みな非なり。未だ曾て佛祖の道を知らざること明らけし。今明かに知る佛祖は實に是世尊の嫡嗣にして。今日の法王なり。三千の調度。法界の緣邊。皆是佛祖の主る所にして。而して更に二つの王あるべからざるなりと。淨祖曰はく。汝の言ふ所の如し。須らく知るべし。西天に未だ兩つの付囑法藏あること聞かず。東土に初祖より六祖に至るまでは。兩つの傳衣なし。所以に大千の佛道は。佛祖を以て本と爲すなりと。淨祖或る時大師に示して曰はく。儞は是後生なりと雖も。頗る古貌あり。直に須らく深山幽谷に居して。佛祖の聖體を長養すべし。必ず古德の證處に至らんと。淨祖又或る時大師に示して曰はく。吾れ儞が僧堂の被位に在るを見るに。晝夜

眠らずして坐禪す。甚だ好きことを得たり。儞向後に必ず美妙の香氣の世間に比ひなきものを聞かん。此乃ち吉祥なり。或は當面に滴油の地に落つるが如きことを見るべし。亦吉瑞なり。若し種々の觸を發するも亦乃ち吉瑞なり。直ちに須らく頭燃を救ひて坐禪すべしと。淨祖或る時。大師に示して曰はく。儞は求法の志操あり。吾の歡喜する所なり。洞宗の托する所は儞即ち是れなりと。淨祖或る時。大師に示して曰はく。汝古佛の操行あり。必ず祖道を弘通すべし。我の汝を得たるは。釋尊の迦葉を得たまへるが如しと。嗟乎。大師一代の化儀。固より格量の表に超脫すと雖も。其の佛法修證の消息を。以上の問答唱酬に就きて考量するときは。稍之を隱約の間に髣髴することを得るなり。蓋し淨祖は是一代の教主に

して。自ら其の屋裏を以て佛法の總府と爲す。而して其の大師と默契神會し。大師の他日を徹見證明したまふこと其此くの如し。子を知るは親に如くはなし。是唯佛與佛なり。唯面與面なり。乃能知是相なり。十方佛亦然と知るべきなり。

第十五章　正覺の成就及び大戒の稟承

大師淨祖に參見したまひしより。天童の僧堂裏にましまして。寒暑を忘れ寢食を忘れ。其の脇曾て席に着かず。孜々汲々日を以て夜に繼ぎ。只管面壁して打坐し。佛祖の大道を參究したまひ。而して朝參暮請も亦曾て廢したまはず。其の此の事に於いて暫時も放過せられざることは。恰も頭上に將に墜ちんとする巖石を戴き。脚下に萬仞の懸崖を履むに齊しく。求

道の心念至切燬くが如く。參究の功業日に益〻成熟す。淨祖或る時後夜の坐禪に入堂し。大衆の睡眠するを嚴誡して曰はく。參禪は須らく身心脫落なるべし。只管打睡して什麼を爲すにか堪へんと。大師傍に於いて豁然として大悟し。直ちに方丈に上りて燒香したまふ。淨祖問ひて曰はく。燒香の事作麼生。大師曰はく身心脫落し來る。淨祖曰はく。身心脫落。脫落身心。大師曰はく這箇は是れ暫時の伎倆。和尙亂に某甲を印すること莫かれと。淨祖曰はく脫落身心。大師禮拜したまふ。時に福州の廣平侍者傍に在りて曰はく。外國人恁麼地なることを得たり。實に細事に非ずと。淨祖曰はく此中幾くか拳頭を喫し。脫落雍容し又霹靂すと。嗚呼此の一段の因緣實に是我が大師が佛祖の大道なる無上正等正覺を成就したま

ひし消息にして。恰も敎主釋尊か三秖百大劫の難行苦行を累ね。應壽三十歲十二月八日の曉天に。耿々たる明星の東方に昇るを見て。豁然として大悟し。即ち諸佛の無上正等正覺を成就して。我大地有情非情と同時に成道すとのたまひしが如し。大師豁然大悟の當處。直下に三世十方の諸佛諸祖と二面裂破し即ち第二人なし。敎主釋尊の我大地有情非情と同時に成道は。即ち是大師の身心脫落にして。大師の身心脫落は。即ち是敎主釋尊の我大地有情非情と同時成道なりとす。即ち是唯佛與佛なり。唯面與面なり。釋尊即ち大師にして。大師即ち釋尊なり。直下第二人なし。此の際此の時大師從前修習の三乘十二分敎。乃至八萬四千の法藏は。悉く魚兎の筌蹄に屬し。毫も用不著なりき。而して毫も用不著なるとき。三乘

十二分敎乃至八萬四千の法藏は。悉く皆大師の屋裏に統攝し了れり。而して淨祖の身心脫落。脫落身心とは。大師と從上佛祖との唯面與面の現成を印可し證明したまひしなり。佛祖門下に之を名けて佛心印の單傳と謂ふ。實に是佛々祖々の要機にして。其の最尊最勝なると之に過ぎたるものなし。然り而して佛心印單傳の理致は。予曾て人の問ひに對へて。聊其の一斑を記したることあり。始めて佛祖の大道を聞く人の爲めに。茲に節畧抄錄す。亦大師成道の因緣を研鑽する一助に供ずるの微意に外ならざるなり。識者之を遼東の白豕と謂はば。予の喜び其將た幾多ぞや。

曹洞宗の實躰實用は如何ん。曰はく敎主釋尊の佛心印を單傳し。敎主釋尊の佛行を行じ。敎主釋尊の佛化を布く。是

曹洞宗の實躰實用にして。亦兩祖の洪範一宗萬世の典憲なり。

佛心とは何ぞ。曰はく吾人の心躰なり。蓋し吾人の心躰たる。豎に無量の時間を貫通す。故に古今なし。横に無限の空間に充塞す。故に際涯なし。生は無生にして生。故に生即無生なり。滅は不滅にして滅。故に滅即不滅なり。去に去處なく來に來處なし。故に去來即無去來なり。本長短方圓の形相なし。故に聖凡染淨の論量を絶す。動じて天地の樞軸を旋轉し。止りて絲毫の纎微に落在す。其の神通や應變無礙。以て萬有を化成し。其の妙用や活達圓轉。以て六合を經紀す。寂靜にして圓照することは。月の澄潭に滉漾するが如く。靈妙にして清虛なることは。花の枝上に開謝

するが如し。眞の最上乘。善の最上乘。美の最上乘。亦企て及ぶべからず。神といふも未だし。聖といふも未だし。物の比倫に堪ふるなし。强ひて名けて佛心といふ。且く人情に隨順するのみ。

印とは何ぞ。曰はく吾人の心躰實に是くの如しと雖も。毫釐の差ひ天地懸隔し。智解情量妄に迷悟苦樂を見る。敎主釋尊慈悲落草。專ら之を開導醒覺せしむ。既に醒覺し了れば。十方三際山河大地天堂地獄自己に同契して。煩惱の厭ふべきなく。菩提の欣ぶべきなく。迷悟生死是非得失苦樂昇沈。毫も吾が事に關らず。木人月下に歌ひ。石女花前に舞ふ。日用光中任運に行持し。飢ゑ來れば喫し困じ來れば睡る。人無心にして道に合し。道無心にして人に合す。此

の際此の時吾人の心躰即ち是釋尊の心躰にして。釋尊の心躰即ち是吾人の心躰なり。其の狀恰も一月の萬水に印し。萬水の一月を印するが如し。千古不變萬世不改。喩へを藉りて之を佛心印といふなり。教主釋尊は之を以て之を迦葉尊者に傳へ。迦葉尊者は之を以て之を阿難尊者に傳ふ。尊者の後二十六傳して達磨大師に至る。大師支那に來蘇して之を慧可大師に傳へ。又二十二傳して天童如淨禪師に至る。禪師乃ち之を我が日本の高祖承陽大師に傳ふ。大師之を本朝に傳光して後。乃兒乃孫流派浩渺枝條蕃衍。今日に至りて其の幾百千萬なることを知らず。

佛心印及び其の嗣承の系統は既に之を悉す。謂はゆる單傳の法は如何ん。曰はく此の佛心印單傳の法たる。從上の佛

祖より。今日の雲仍に至るまで。諸緣を拋捨し萬事を休息して。只管打座の王三昧に住し。吾人の心躰を實參實究し。師資針芥相投じて。證契即通し。師資面授面稟して。二面裂破す。面々相對して。師資一如なることは。鏡々相對して。中に影像なきが如く。心々相證して。師資不二なることは。子還りて父に就くとき。父子相絶し。言語道斷するが如し。佛々祖々乃至今日の雲仍。如是に單傳し如是に相承す。道環して端なく。聯綿として絶えず。三世古今一貫に串却し。幾千萬人一位に歸入す。一燈傳へて萬燈に點ず。萬燈即ち一燈なり。而して燈々曾て異光なし。一源分れて萬派に注ぐ。萬派即ち一源なり。而して派々毫も異水なし。佛心印の單傳其の法其此くの如し。而して是此の單傳。之

を心に證するを宗義の相承と謂ひ。之を形に顯すを法脈の相續と謂ふ。宗義の相承法脈の相續。是即ち佛祖の法壽慧命にして。即ち是曹洞宗の實躰なり。

是此の佛心印單傳の消息。大師後に正法眼藏佛祖の卷に於いて。垂訓してのたまはく。道元大宋國寶慶元年乙酉夏安居の時。先師天童古佛大和向に參侍して。此の佛祖を禮拜頂戴することを究盡せり。唯佛與佛なりと。又正法眼藏面授の卷に於いて。垂訓してのたまはく。道元大宋國寶慶元年乙酉五月一日。はじめて先師天童古佛を禮拜面授す。やゝ堂奥を聽許せらる。わづかに身心を脱落するに面授を保任することありて。日本國に本來せりと。嗚呼豈最尊最勝の事ならずや。是の歳九月十八日。大師淨祖より佛祖正傳の大戒を稟承したま

ふ。即ち菩薩の大戒なり。今日我等大師兒孫。及ひ宗門の檀徒信徒の稟受し行持する所の大戒は即ち是なり。其の大戒は。正法眼藏受戒の卷に詳悉せり。未だ稟受せざるものは。就て拜讀し及び稟受すべし。是より先。大師の菩薩戒を受けたまひしこと二回あり。其の一は叡山に於いて公圓僧正に受けたまひ。其の一は建仁寺に於いて明全和尚より受けたまふ。此に至つて前後二回なりとす。然れども淨祖より受けたまひしは。西天東土佛祖嫡々相承の大戒なれば。之を混淆すべからず。而して此の時作法の式場に列なり。周旋奉侍したるものは。祖日侍者。宗端知客。廣平侍者等なり。

第十六章　正覺成就後の坐禪辨道

大師既に無上正等正覺を成就し。如來の正法眼藏涅槃妙心を單傳し。而して日夜に坐禪辨道して。此の事に粉骨碎身したまひ。毫も間斷放過せられしことなし。今時の未だ佛祖の行履を知らざる人は。或は疑ひて言ふべし。既に正覺を成就し畢りて。何の爲めに坐禪辨道し。而かも粉骨碎身したまふかと。蓋し佛祖の無上正等正覺は。修證一等にして。修證不二なり。修の外に證を見ず。證の外に修を見ず。修の證にして證の修なり。修證一等なり。修證不二なり。而かも是れ不染汚なりとす。大師他日正法眼藏辨道話に於いて。這裏の消息を垂訓したまへり。曰はく。

とふていはく。この坐禪の行は。いまだ佛法を證會せざらんものは。坐禪辨道してその證をとるべし。すでに佛正法

をあきらめえん人は。坐禪なにのまつところかあらん。しめしていはく。癡人のまえにゆめをとかず。山子の手には舟棹をあたへがたしといへども。さらに訓をたるべし。それ修證はひとつにあらずとをもへる。すなはち外道の見なり。佛法には修證これ一等なり。いまも證上の修なるゆゑに。初心の辨道。すなはち本證の全躰なり。かるがゆゑに修行の用心をさづくるにも。修のほかに證をまつおもひなかれとをしふ。直指の本證なるがゆゑなるべし。すでに修の證なれば證にきはなく。證の修なれば修にはじめなし。こゝをもて釋迦如來迦葉尊者。ともに證上の修に受用せられ。達磨大師大鑑高祖。おなじく證上の修に引轉せらる。佛法住持のあとみなかくのごとし。すでに證をはなれぬ修

あり。われらさいはひに一分の妙修を單傳せる初心の辨道。すなはち一分の本證を無爲の地にうるなり。しるべし修をはなれぬ證を染汚せざらしめんがために。佛祖しきりに修行のゆるくすべからざるとをしふ。妙修を放下すれば。本證手の中にみてり。本證を出身すれば。妙修通身におこなはる。又まのあたり大宋國にしてみしかば。諸方の禪院。みな坐禪堂をかまへて。五百六百および一二千僧を安じて。日夜に坐禪をすゝめき。その席主とせる傳佛心印の宗師に。佛法の大意をとふらひしかば。修證の兩段にあらぬむねをきこえき。このゆゑに。門下の參學のみにあらず。求法の高流。佛法のなかに眞實をねがはん人。初心後心をえらばず。凡人聖人を論ぜず。佛祖のをしへにより。宗匠の道を

おふて。坐禪辨道すべしとすゝむ。きかずや祖師のいはく。修證はすなはちなきにあらず。染汚することはえじ。又いはく。道をみるもの道を修すと。しるべし得道のなかに修行すべしといふことを。

當に知るべし。大師既に無上正等正覺を成就ましましきと雖も。尙天童の僧堂裏に在して。粉骨碎身坐禪辨道したまひしことを。而して大師の坐禪辨道は。啻に此の際のみにあらずして。入滅の夕べに至るまで。曾て間斷したまふことなし。即ち過去の久遠劫より盡未來際に至るまで。曾て間斷したまはざるなり。是大師參禪辨道の消息なりと知るべし。

第十七章　正覺成就後の消息

其の一　淨祖より侍者に請せられて固辭したまふ
其の二　理宗皇帝より李龍眠の羅漢畫像を贈らる
其の三　中央及び地方官吏諸秀才等を接化せらる
其の四　補陀洛迦山の觀世音菩薩を禮拜したまふ
其の五　稻荷大明神出現して急病を救護したまふ
其の六　韋馱尊天出現して其の歸朝を慫慂せらる

大師天童の僧堂裏に在して。坐禪辨道。朝參暮請。曾て一日も之を廢したまはず。道業成熟して。德風人に薰ず。淨祖偶〻大師に請ひて侍者たらんことを求め。告げて曰はく。元子外國の人なりと雖も。道眼圓明にして。智德既に備り。一會の衆僧企及するものなし。依つて侍者に請すと。禮至り辭盡す。大師固く之を辭してのたまはく。不肖幸に其の知遇を辱

なうす。感荷曷ぞ堪へん。敢て恩命に服するときは。日夜左右に奉侍し。芝蘭の薰化を蒙り。其の法益の多きことは。まことに測り知るべからず。中心實に之を切望すと雖も。一會の衆中に。若し其の人あるときは。不肖身を容るるに地なく。慚恐慚惶の至りに堪へず。而して或は一會の衆中に。縱ひ其の人なしとするも。外國の小人。叨に巨刹の要司に膺る。啻に巨刹の名聲を汚すのみに非ず。亦た大宋に其の人の乏しきを暴露するが如し。亦惶懼の至りに堪へず。冀はくは朋人を以て之に補したまへと。淨祖其の至言に服し。敢て之を强ひたまはざりし。是より先。大師の聲譽。既に世出世を聳動す。理宗皇帝深く大師の盛德を敬慕して。畫宗李龍眠の絕筆なる十六羅漢尊者の畫像を贈りたまふ。蓋し御庫の秘寶なり。又

李樞密、陳參政、王觀察、溥侍郎、王員外、陳觀察等の諸宰官より。文秀才茹秀才以下數十名の居士は。深く大師に歸仰して。其化益に浴せり。大師或る時昌國縣の補陀洛迦山に詣り。大悲弘誓の觀音淨聖を禮拜したまふ。因みに偈あり曰はく。聞思修入三摩地。自已端嚴現聖顏。爲告來人明此意。觀音不在補陀山。蓋し箇々面前の觀自在。人々一座の補陀山なることを垂示したまふなり。大師と弘誓淨聖との相見。亦た唯佛與佛なり。乃能究盡なり。誠に最尊最勝のことなりとす。補陀洛迦山は今の舟山島に在り。相傳ふ文德天皇齊衡元年慧夢和尚再び入唐し。五臺山に登りて觀音菩薩の聖像を感得し大中十二年歸朝の途次。靈驗に依つて聖像を茲に奉ぜり。四方の士民深く之に歸仰し。後に蔚として禪門の叢林と爲り。

和尚を以て開山始祖と爲すと云ふ。大師或時江西に行化し曠野を過ぎて。劇甚の急症に罹りたまひしが。醫療致すに由なくして已に九死に瀕したまふ。侍者道正看護に力を盡ししかど。遂に回起の色なし。時に白衣の神嫗あり。化現して藥を授けしかば。道正之を大師に捧げて服せしめけるに。病忽ちにして癒ゆ。道正大いに喜び。嫗に謝し且名を問ふ。嫗の曰はく。吾は日本の稻荷神なり。元公求法の大願に感じ。常に隨つて擁護し奉れり。今や事頗る急なり。故に聊救濟し奉ると。又藥方を道正に口授し。以て他日の急に備へしめ。忽ちにして見えず。道正歸朝の後。稻荷祠を自第に創建し。歲時に祭祀して其の恩德を報謝し。又神授の靈藥を製して。大師の會下に頒つ。神仙解毒萬病圓是なり。而して道正の子孫其

方を傳へ。毎歳之を製して。大師の法孫に頒ち以て今日に及べり。大師一日行化の因み。神童あり道傍に化現す。大師に告げて曰はく。聖者道業既に熟す。宜しく速かに日東に歸錫し。大法を弘通して。以て人天を化益すべしと。大師之を異とし其の名を問ひたまひしかば。對へて曰はく吾は韋將軍なりと。言訖つて見えず。蓋し韋馱尊天なり。今日全國の宗門寺院に於いて必ず庫堂に鎮安し奉るもの是れなり。韋馱尊天姓は韋諱は琨。南方天王八將の一臣なり。生知聰慧にして早く塵欲を離れ。梵行を清淨して童眞業を修し。面り佛囑を受けて外護懷に在き。用て三洲を統べ住持を最と爲し。物に達し化に達して大いに五乘を濟ふ。唐の高宗の朝より。到處の寺院皆其の像を設けて崇敬し。以て護法の功を禮謝す。靈感

の昭々たること枚擧に遑ざるなり。金光明經鬼神品に於いて。世尊其の威德を稱してのたまはく。大力勇猛にして常に世間を護り。晝夜離れずと。其の大師に歸朝を促し。大法の弘通人天の化益を慫慂せられしは。良に以あるなり。韋馱は梵語にして譯して智論と云ふ。

第十八章　歸朝及び其の前後の消息

其の一　天童の告別及び淨祖より衣法を授與せらる
其の二　碧巖錄の書寫白山明神化現して助筆せらる
其の三　大權修理菩薩同航來朝し化儀を擁護せらる
其の四　海上颶風遭難觀音淨聖出現して救護せらる
其の五　肥後國河尻に着船し建仁寺に歸錫したまふ

寶慶三年大師年二十八。即ち日本の嘉祿三年にして。此の年安貞と改元せり。大師在宋既に五年なりしが。此の秋韋馱尊天より歸朝の慫慂を受けたまふや。初めて度生時緣の漸く熟するを悟られ。淨祖に丈室に謁し。燒香禮拜し涕淚悲泣して。罔極法乳の慈恩を感謝し。告別歸東の旨を陳べたまへり。淨祖强ひて留むべきにもあらざれば。老懷無恨の感慨を催し。遂に之を聽許したまふ。尋いで侍者に命じて。道場を嚴飾せしめ。大師を召し。芙蓉楷祖の袈裟。寶鏡三昧。五位顯訣。並びに自贊の頂相を授け。告げて曰はく。汝は異域の人なるを以て。之を授て大法嗣承の信を表するなり。國に歸りて大法を宣布し。廣く人天を利濟すべし。又城邑聚落に住することなかれ。國王大臣に親近することなかれ。只深山幽谷に居

して。一箇半箇を接得し。吾が宗をして斷絕せしむるとなかれと。大師感泣拜謝して。遂に淨祖に訣別したまふ。蓋し芙蓉楷祖は。釋尊第四十六世の正嫡にして。淨祖六世の祖たり。宋の徽宗皇帝崇寧年中に。東京天寧寺に住し。道業卓絕にして一世を風靡し。隨徒常に一千人に下らず。王侯士庶皆之に歸仰し。亦支那に於ける宗門中興の祖師なり。而して大師の授りたまひし楷祖の袈裟は。大師六世の法孫無著妙融禪師に傳り。今現に豐後の國泉福寺に秘藏し奉れり。其の寶鏡三昧は。洞山悟本大師の垂訓にして。實に宗門室內の秘寶なり。又其の五位顯訣は曹山本寂禪師の敎示にして。悟本大師の垂訓なる正偏宛轉の法門を祖述したるものとす。是亦宗門室內の秘寶なり。又其の淨祖自贊の頂相とは。淨祖の眞影に淨祖自ら題

賛せられしものにて。　總べて是大法の嗣承を顯詮する憑證たり。夫淨祖と大師との因緣會遇は。假令唯佛與佛乃能究盡の端的に出づと雖も。假令諸佛菩薩諸天諸神の冥護ありしに由ると雖も。然れども淨祖の天童に住したまひしは。大師入宋の第三年にして。而して大師歸朝の翌年に入寂したまへば。乃ち知る淨祖は大師接化の爲めに天童に視篆したまひ。大師は淨祖に親參の爲めに宋土に觀光したまふことを。池を鑿りて月を待たざれども。池成りて月自ら來る。而して池の月を印するか。月の池に印するか。大圓鏡裏唯佛與佛の感應道交は。實に是不可思議不可商量なりとす。大師既に淨祖に訣別したまひ。歸裝を理せらるゝに當り。日本の商船偶〻慶元に繫泊し。艤裝して將に纜を解かんとす。其の期明日に在り。此の夕べ佛果圜悟禪師の碧巖錄を道友の許に瞥見したまふ。題して佛果碧巖破關擊節と謂ふ。是より先大師其の名を聞きたまふこと久しゝ。然れども未だ曾て見たまふこと能はざりき。因つて直ちに其の一二紙を披見したまひしに。其の拈提評唱。渾金璞玉にして。氣格超邁。韻致奔逸。卷を措くこと能はず。即ち乞ひて之を借り。室に歸りて謄寫したまふに。夜色深沈として漏聲屢〻移り。更既に酣ならんとして。卷帙未だ半に達せず。大師憂心忡々。乘槎の期已に明日に迫りて。而して事其の志しと違はんとす。忽ち白衣の神人化現して。孜々之を助筆し。鷄鳴の頃。謄寫の業全く卒る。大師深く神人に謝し。且其の姓名を問ひたまひしに。神人曰はく。吾は是日本の白山神なりと。言訖つて忽ち滅す。是れ今日世

に嘖々たる所の碧巖錄にして。此の時大師に依りて。始めて我國に傳りたるなり。此の寫本は世に之を一夜碧巖と稱して。現に加賀の國金澤の大乘寺碧巖室中に秘藏し。而して祖筆と神筆と墨痕筆蹟明かに分てり。大乘寺は大師三世の正嫡徹通義介禪師の開創する所。宗門屈指の巨刹にして。永平寺四門首の一たり。而して此の神聖なる寶典の大乘寺に傳承秘藏せらるるは。三祖徹通禪師の珍襲したまひしに依れり。白山神祠は加賀に在り。神書の碧巖も亦加賀に祕藏す。奇遇といふべきなり。蓋し白山權現は。佛法守護の大統領にして。大師常に念持したまひ。入宋上程の時にも特に祈誓したまひし神明なりとす。明日大師天童山を拜辭し。舟に上り江を下りたまふ。舟招寶山下を過ぐ。忽ち一神人あり舳に現ず。峩冠盛

裝右手を額に捧げ。大師に告げて曰はく。予は是大權修理菩薩なり。師今佛心印を單傳して本國に歸りたまふ。予隨從入朝し以て大法を擁護し奉つると。言訖つて見えず。今全國宗門の寺院に必ず鎭安する所の大權菩薩是なり。蓋し大權菩薩は。釋提桓因にして。唐の宣宗皇帝深く恭敬尊崇し。之に大權修理菩薩の尊號を上りたまひしなり。是より先。唐の武宗會昌五年。帝道士趙歸眞の誑惑する所となり。天下に令して佛像經卷を燒棄し。寺院を毀壞し。僧尼を還俗せしむ。其意佛教を滅亡せしむるに在るなり。時に帝の叔父李忱曩に出家求法して。墟官の會に在り。偶〻會稽に至り。釋提桓因の祠宇に詣し。佛法の再興を祈願す。桓因夢に託して告げて曰はく。三年の後汝必ず帝位を承くべし。應に自ら勤めて佛法を

興隆すべしと。忱醒て心竊に之を悅ぶ會昌六年武宗崩ず。宗族群臣議を定めて。李忱を迎へ立つ忱乃ち復飾して位に即く。宣宗皇帝是なり。元を大中と改め。天下に令して大いに佛敎を興復せしむ。釋提桓因に大權修理の菩薩號を上りしは。乃ち是年二月なりき。又支那に於いて大權菩薩を護塔の神と稱せり。即ち今日我國宗門の寺院に於いて。必ず之を尊敬安置し奉るは。實に大師に隨ひて入朝し。大法を守護したまふに由ると雖も。又寺院の伽藍堂塔を守護したまふに由るなり。

已にして大師の舟大洋に出づ。水天一色。渺として際涯なく。大陽の出沒を見て。僅に東西の方向を知るのみ。一日黑雲天の一方より起り。漸く大空に彌蔓す。舟子色を失なふ。既にして颶風忽ちに起り。暴雨大いに至る。怒濤狂瀾洶湧澎湃し。

一扁の孤舟は。已に將に覆沒せんとすること數回。滿船みな叫喚悲慟し。各〻死を待つが如し。大師蓬窓に在り默然として端坐し。少頃時を移したまひしに。忽ちにして觀世音菩薩は。一片の蓮葩に駕し。大師の舟頭に出現したまふ。須臾にして。風雨徐に收り。波濤漸く平かにして。扁舟遂に危難を免るゝことを得たり。大乘妙典普門品に。「衆生困厄せられ。無量の苦身に逼るに。觀音の妙智力は。能く世間の苦を救ひ。神通力を具足して。廣く智方便を修し。十方諸〻の國土に。刹として身を現ぜずといふことなし。或は巨海に漂ひ流れ。龍魚諸〻の危難あらんに。彼の觀音の力を念ずれば。波浪も沒ることを能はず」と。蓋し是れ之を謂ふなり。大師と觀音淨聖と。唯佛與佛なり。乃能究盡なり。誠に最勝最尊の事ならずや。

既にして十數日風順に波穩かにして。舟肥後の國の河尻に達しぬ。是れより陸路京師に歸錫し。建仁寺に止住したまふ。嗟乎無上正等正覺なる佛祖單傳の正法眼藏涅槃妙心は。五百年不世出の至聖に依りて。此の時始めて我が日本に傳はれり。先帝孝明天皇の勅して佛性傳東の師號を諡したまひしは。誠に旨あるなり。是より先。大師の肥後に上陸したまふや。觀音淨聖の危難を救ひたまひしを感謝し。親ら海上に於いて拜せられし淨聖の尊像を彫鐫し。之を河尻の寺院に安置したまふ。今の南溟山觀音寺是なり。其の淨聖は俗に南溟觀音の稱あり。後に寺僧其像を拜寫し。大師に贊を乞ふ。贊に曰はく。

一華五葉開。一葉一如來。弘誓深如海。回回運善財。寺僧之を木王に鐫めて印行し。廣く十方の道俗に頒ち。以て菩提の

勝因を結ばしむ。

第十九章　唱道の宗旨

大凡大師一代の化儀を知悉せんと欲せば。先づ大師の一代に唱道ましましし宗旨を知悉せざるべからず。夫れ大師一代唱道の宗旨とは。即ち謂はゆる無上正等正覺にして。如來の正法眼藏涅槃妙心なり。梵語に之を阿耨多羅三藐三菩提と謂ひ。達磨門下に之を佛祖單傳の大道と謂ふ。大師の之を成就したまひし因緣。大師の之を單傳したまひし趣致は。曩に既に之を悉くせり。然り而して謂はゆる如來の正法眼藏涅槃妙心なる無上正等正覺は。如來一代の言教も亦之を盡したまふことと能はず。之を盡したまふことと能はざるには非ず。之を盡すべ

からざるを以てなり。是の故に如來法華會上に於いて。止々不須說。我法妙難思とのたまひ。又入涅槃の夕べには。我四十九年一字不說とのたまへり。當に知るべし如來の一代の言教たる三乘十二分教。乃至八萬四千の法藏は。如來の正法眼藏涅槃妙心なる無上正等正覺を盡したまひしにあらずして。而して其の一代の言教なる三乘十二分教。乃至八萬四千の法藏は。如來の正法眼藏涅槃妙心なる無上正等正覺の一斑に止ることを。是を以て更に應に知るべし。如來の正法眼藏涅槃妙心なる無上正等正覺の中に。一代の言教たる三乘十二分教。乃至八萬四千の法藏ありと雖も。一代言教たる三乘十二分教。乃至八萬四千の法藏の各々に。各々の如來の正法眼藏涅槃妙心なる無上正等正覺あるには非ざるなり。是を以て又更に應に知

るべし。正法眼藏涅槃妙心なる無上正等正覺は。實に是佛法の本源にして。三乘十二分教乃至八萬四千の法藏は。即ち是佛法の支流なることを。是の故に教主釋尊の化導を被りたるもの。當時幾百萬人ありしを知らずと雖も。謂はゆる正法眼藏涅槃妙心なる無上正等正覺を單傳したるものは。獨り摩訶迦葉尊者のみにして。他は之を單傳すること能はざりき。其の因緣は。世尊靈山會上に於いて。一日陞座。金跋羅華を拈して。揚眉瞬目したまひしに。衆多の僧伽は其の何の謂ひたることを知らず。獨り迦葉尊者のみ。之を見て覺えず破顏微笑したまふ。時に世尊大衆に告げて曰はく。吾に正法眼藏涅槃妙心あり。摩訶迦葉に付屬すと。夫れ拈華瞬目は不說の我法なり。破顏微笑は不聞の我法なり。我法は妙難思なり。

故に不說にして說破し。我法は妙難思なり。故に不聞にして聞取す。是唯佛與佛なり。唯面與面なり。乃能究盡なり。這裏に至りて。三乘十二分教乃至八萬四千の法藏は。總べて是用不著にして。總べて又這裏に攝收し了れり。是の故に教主釋尊は。吾有なる正法眼藏涅槃妙心を以て摩訶迦葉尊者に付屬したまひしなり。是を以て又當に知るべし。佛法の本源即ち如來の正法眼藏涅槃妙心なる無上正等正覺を成就し單傳するとき。佛法の支流なる三乘十二分教乃至八萬四千の法藏は。總べて是這裏に統屬攝收せられ。毫も遺餘あることなきを。迦葉尊者より後。祖々相承け。心々相印して。以て我が大師に至る。恰も一器の水を一器に瀉ぐが如く。毫も增減變易あることなし。古今一貫にして千古不改なり。故に大師の淨祖

と師資證契面授面稟したまふ所は。即ち是從上祖師の師資證契面授面稟したまふ所は。即ち是迦葉尊者の教主釋尊と師資證契面授面稟したまふ所なりとす。啻に爾かのみならず。大師は淨祖に面授し。淨祖は大師に面稟し。乃至歷代の祖師も。資は師に面授し。師は資に面稟す。即ち迦葉尊者は教主釋尊に面授したまひ。教主釋尊は迦葉尊者に面稟したまふ。佛々祖々心印單傳の消息乃ち其此くの如し。是を以て釋尊の吾有なる正法眼藏涅槃妙心は。即ち迦葉尊者の吾有なる正法眼藏涅槃妙心なり。迦葉尊者の吾有なる正法眼藏涅槃妙心は。即ち從上祖々乃至我が大師の吾有なる正法眼藏涅槃妙心なり。又是無上正等正覺なり。阿耨多羅三藐三菩提なり。故に謂ふ。教

主釋尊の我大地有情非情同時成道は。即ち是大師の身心脫落にして。大師の身心脫落は。即ち是教主釋尊の我大地有情非情同時成道なりと。啻に爾かのみならず。教主釋尊は身心脫落して。大地有情非情同時成道ましまし。大師は大地有情非情同時成道して。身心脫落したまふ。同時成道と身心脫落は。大師と釋尊と同時同處にして。身心脫落と同時成道は。釋尊と大師と同人同體なり。這裏に至りて。教主釋迦牟尼佛は。即ち是我が承陽大師にして。我承陽大師は即ち是教主釋迦牟尼佛なり。故に曰はく教主釋尊の正法眼藏涅槃妙心は。即ち是れ我が大師の正法眼藏涅槃妙心なりと。大師既に佛法の本源なる正法眼藏涅槃妙心を以て。自己の宗旨と爲したまへり。佛法の支流なる三乘十二分教。乃至八萬四千の法藏は。悉く

大師の屋裏に統攝せられ。毫も遺餘あることなきは。復多言を要せざるなり。大師の屋裏既に三乘十二分教乃至八萬四千の法藏を統攝し。毫も遺餘あることなきこと其此くの如し。華嚴、天台、眞言、淨土等より。三論、法相、俱舍、成實等の諸宗門に至るまで。總べて是大師の宗旨に單傳相承し了る。復何ぞ聒々聞々として聖道淨土自力他力の邊際に局量せんや。而して華嚴、天台、眞言、淨土より。乃至三論、法相、俱舍、成實等の諸宗門は。總べて是れ大師の宗旨に單傳し了ると雖も。華嚴、天台、眞言、淨土乃至三論、法相、俱舍、成實等の諸宗門の各々に。各々の大師の正法眼藏涅槃妙心あるには非ざるなり。恰も如來の正法眼藏涅槃妙心の中に。一代の言教たる三乘十二分教乃至八萬四千の法藏ありと雖も。一代の言教たる三乘十二分教乃至八萬四

千の法藏の各々に。各々の如來の正法眼藏あらざるが如し。大師或る時這裡の玄旨を垂訓してのたまはく。佛祖單傳は唯是我が釋迦牟尼佛の正法なり。阿耨多羅、三藐三菩提なり。所以に須らく知るべし。佛法の中に法華華嚴等あり。法華華嚴等の各々の中に。各々の佛法あるには非ざるなり。然らば則ち法華華嚴等八萬四千の法藏は。盡く是佛祖單傳なりと。是を以て應に知るべし。大師唱道の宗旨は。如來の正法眼藏涅槃妙心にして。而して大師の屋裏は。佛法一切の宗旨なる華嚴、天台、眞言、淨土より。乃至三論、法相、俱舍、成實等を包括網羅して。統屬攝收する佛法の總府なりと。故に大師唱道の宗旨は。如來の正法眼藏涅槃妙心なることを知り。又大師の屋裏は。佛法の總府たることを知らば。大師の化儀其將た管見蠡測することを得るに庶幾からんか。

第二十章　弘教傳道の起點普勸坐禪儀の撰述

後堀河天皇嘉祿三年秋。大師の建仁寺に歸錫したまふや。直に榮西先師の塔廟を禮拜し。尋いで明全和尚の舍利を其の塋域に葬り。殷勤に追福の法要を營辦したまふ。大師の兄弟叔姪乃至近親戚屬は。皆其の恙なく歸朝したまふを喜び。大師に參見して。感涙を垂れ。祝意を叙し。實に再生の懷ひを惹きたるが如し。既にして大師は四方道俗の參見聞法するもの。日に月に多きを加ふるを以て。普勸坐禪儀一篇を撰述したまふ。是參見問法の道俗に對して。普く坐禪を勸めたまふの素

懷に出でたるものなり。此の書の撰述は。實に大師の我が國に於ける弘教傳道の起點にして。又曹洞宗の今日に成立興隆する根基なり。又普勸坐禪儀は。即ち無上正等正覺なる佛祖單傳の大道にして。上は三賢十聖より下は四生六通に至るまで。悉く之に依りて無上正等正覺を成就せしむる。宇宙古今唯一無二の眞實理にして。經國經世の大本極致なり。然り而して大師此の後の撰述なる。學道用心集。永平清規。正法眼藏及び時々の拈提評唱教誨訓誥は。皆坐禪儀と一枚の轉法輪にして。決して異調異曲の多岐に涉たるものには非ざるなり。而して大師の此の坐禪儀を垂誨したまふや。參見聞法の道俗は。唯希有殊勝の感のみありて。之が高妙玄遠の理致を領ずること能はず。恰も釋尊成道の後。菩提樹下に在して。華嚴

經を說きたまひしに。聞法の道俗は毫も其の義を領ずること能はず。聾の如く啞の如くして。唯希有殊勝の感のみありしが如し。爰に於いてか大師は釋尊の三七日間菩提樹下に思惟したまひしが如く。又達磨大師の少林に九年の面壁したまひしが如く。是より日夜只管に坐禪して。暫く爲人接衆を廢したまへり。蓋し是れ從上佛々祖々の世間に出現まします常軌にして復異とするに足らざるなり。今や茲に大師の普勸坐禪儀を錄して。未だ曾て之を閱覽せざるの人に示すべし。假令遽に之が理致を領ずること能はざるも。其の中に就きて。一字若しくは一句を受持し。又は思惟し修習するときは。成等正覺の種因となりて。必ず無量無邊福德の利益を得べきなり。

普勸坐禪儀

原夫道本圓通。爭假修證。宗乘自在。何費功夫。況乎全體迥出塵埃。孰信拂拭之手段。大都不離當處。豈用修行之脚頭者乎。」然而毫釐有差。天地懸隔。違順纔起。紛然失心。直饒誇會豐悟。獲瞥地之智通。得道明心。擧衛天之志氣。雖逍遙於入頭之邊量。幾虧闕於出身之活路。矧彼祇園之爲生知。端坐六年之蹤跡可見。少林之傳心印。面壁九歲之聲名尚聞。古聖既然。今人盡辨。所以須休尋言逐語之解行。須學回光返照之退步。身心自然脫落。本來面目現前。欲得恁麼事。急務恁麼事。夫參禪者。靜室宜焉。飲食節矣。放捨諸緣。休息萬事。不思善惡。莫管是非。停心意識之運轉。止念想觀之測量。莫圖作佛。豈拘坐臥乎。」尋常坐處。厚敷坐物。上用蒲團。或結跏趺坐。或半跏趺坐。

謂結跏趺坐。先以右足安左胜上。左足安右胜上。半跏趺坐。但以左足壓右胜矣。寬繫衣帶。可令齊整。次右手安左足上。左掌安右掌上。兩大拇指面相拄矣。正身端坐。不得左側右傾。前躬後仰。要令耳與肩對。鼻與臍對。舌掛上腭。唇齒相着。目須常開。鼻息微通。身相既調。欠氣一息。左右搖振兀兀坐定。思量箇不思量底。不思量底如何思量。非思量。此乃坐禪之要術也。」所謂坐禪非習禪也。唯是安樂之法門也。究盡菩提之修證也。公案現成。羅籠未到。若得此意。如龍得水。似虎葬山。當知正法自現前。昏散先撲落。若從坐起。徐徐動身。安詳而起。不應卒暴。」嘗觀超凡越聖坐脫立亡。一任此力矣。況復拈指竿針鎚之轉機。擧拂拳棒喝之證契。未是思量分別之所能解也。豈爲神通修證之所能知也。可爲

聲色之外威儀。那非知見之前軌則者歟。」然則不論上智下愚。莫簡利人鈍者。專一功夫正是辨道。修證自不染汚。趣向更是平常者也。」凡夫自界他方。西天東地。等持佛印。一擅宗風。唯務打坐。被礙兀地。雖謂萬別千差。祇管參禪辨道。」何拋却自家之坐牀。設去來他國之塵境。若誤一歩。當面蹉過。」既得人身之機要。莫虛度光陰。保任佛道之要機。誰涙樂石火。加以形質如草露。運命似電光。倏忽便空。須臾卽失。」冀參學高流。久習摸象。勿怪眞龍。精進直指單的之道。尊貴絶學無爲之人。合沓佛佛之菩提。嫡嗣祖祖之三昧。久爲恁麼。須是恁麼。寶藏自開。受用如意。」

第二十一章　深草の閑居

寛喜元年大師年三十。歸朝したまひてより已に三年を經れども。猶觀機三昧の中に在り。是の歳山城の國宇治郡深草の里なる。甚だわびしき安養院と名くる廢院に遷られ。諸佛諸祖の勝躅を履みて。日夜只管に打坐したまふ。其の消息は固より言詮の及ぶ所に非ずと雖も。當時筆すさみしたまひて曰はく。

雙忘取捨思偸然。萬物同時現在前。佛法從今心既盡。身儀向後且隨緣。

大用現前當眼新。雖然如是曷呈眞。愁人莫向愁人說。向道愁人愁殺人。

生死可憐雲變更。迷途覺路夢中行。唯留一事醒猶記。深草閑居夜雨聲。

嗚呼。大師任運騰々の高風清致は。自然に毫端に溢れ出で。聖懐の坦々蕩々たること。千古の下。人をして欣慕已むことを能はざらしむ。然り而して寶劍地に埋るるときは。紫電北斗を射。神龍壑に潜むときは。雲氣蒼穹に迸る。大師の聖德は何人の唱道する所なきも。自然に四方に喧傳し。人敢て其の名を稱せずして。唯た深草の佛法房の聖人と謂へり。桃李言はず。其の下自ら蹊を成す。諸宗の高僧より王侯將相士庶民に至るまで。次第に弟子の禮を執て參見聞法せり。爰に於いてか。辨道話なる垂訓あり。是正に寛喜三年中秋の日にして。四方來集の緇素何れも。歡喜讃仰せざるはなかりき。此の垂訓は。大概假名文字を用ひたまひ。載て正法眼藏にあり。此の後の時々の垂訓にして。正法眼藏中に載せたるものは。皆

體を此に取られたり。蓋し何人にも讀誦し易からしめんとの慈悲落草なりと云ふ。已にして大師は度生機緣の純熟することを觀察したまひ。同じく深草の里なる極樂寺の舊趾に就き。一寺の建立を發願したまふ。蓋し安養院の幽居は。僅に膝を容るるに過ぎずして。緇素を接化すべき道場に堪へざるを以てなり。而して極樂寺の舊趾には。從來の佛殿の存するのみなりしが。天福元年の春大師之に移錫したまひ。名けて觀音導利院と云ふ。此年御年三十四歳なりき。

第二十二章　二祖孤雲禪師の歸投及び其の小傳

文暦元年大師年三十五。觀音導利院に在して。日夜鞠躬盡瘁

内外道俗の接化に從事したまふ。是の歳日本曹洞宗の第二祖孤雲懐奘禪師。大師に參見して衣を更へ歸投せらる。抑〻大師の宗旨たる。即ち依經解義と流を異にし。以心傳心以て大法を相續するを則とす。故に相續其の人を得るは。佛祖遞代皆以て大難を爲したまふ所にして。固より創業の主の守成の人を望むが如き類と。日を同じくして語るべからざるなり。而して大師は實に此の時相續其の人を得たまひしなり。恰も淨祖の大師を得。達祖の二祖を得。釋尊の迦葉尊者を得たまひしが如きなり。是の故に大師若し奘祖を得たまはざれば。大師の正法眼藏涅槃妙心は。予其の今日に傳ふると否ざるとを知らざるなり。又曹洞宗の今日に存すると否ざるとを知らざるなり。而して奘祖の心操行持は。大師四世の正嫡弘德圓

明國師奘祖滅後二十一年即ち正安二年に於いて。人の爲めに示誨の因み。其の一斑を述べられたり。因つて茲に之を錄しぬ。蓋し國師は。奘祖に永平寺に就きて剃髪具戒し。久しく之に親炙せられしを以て。其の片言隻句も實に奘祖の暖皮肉を拜する感あり。其の言に曰はく。

予二代和尚の尋常の垂示をききしに曰はく。「佛樹和尚の門人數輩ありしかども。元師ひとり參徹す。元和尚の門人また多かりしかども。われひとり函丈に獨歩す。ゆゑに人のきかざるところをきけることはありといへども。他のきけるところをきかざることなし。卒に宗風を相承してより後。尋常に元和尚。師をもて重んぜらる。師をして永平の一切佛事をおこなはしむ。師その故をとへば。和尚示して曰は

く。わが命ひさしかるべからず。汝われよりひさしくして。決定わが道を弘通すべし。ゆゑにわれ汝を法の爲めに重くす。室中の禮。あだかも師匠のごとし。四節ごとに太平を奉らるること是くの如く。義をおもくし禮をあつくす。師資道合し。心眼ひかりまじはり。水に水を容れ空に空を合するに似たり。一毫も違背なし。たゞ師ひとり元和尚の心を知る。他のしるところにあらず。(中畧)。しかのみならず。二十年中。師命によりて療病せし時。師顏に向はざること。首尾十日なり。南嶽懷讓六祖に奉侍せしこと。未徹以前八年。已徹して以後八年。前後十五秋の星霜をおくる。その外三十年四十年。師をはなれざる。おほしといへども。師のごとくなる古今未だ見聞せざるなり。しかのみならず。

永平の法席をつぎて十五年のあひだ。方丈のかたはらに先師の影を安じて。夜間に珍重し曉天に和南して。一日もおこたらず。世々生々奉侍を期し。卒に釋尊阿難のごとくならんとねがひき。なほ今生の幻身もあひはなれざらん爲めに遺骨をして。先師の塔の侍者の位にうづましむ。別に塔をたてず。塔はもて尊を表するをおそれてなり。同寺において。わが爲に別に佛事を修せんことをおそれて。先師忌八箇日の佛事の一日の回向にあづからんとねがひ。果して同月二十四日に終焉ありて。平生の願樂のごとく開山忌一日を占む。志氣の切なること。あらはる。しかのみならず。義を重くし法を守ること一毫髮も開山の會裏にたがはず。ゆゑに開山一會の賢愚老少悉く一歸す。今諸方に永平門下

と稱するみなこれ師の門葉なり。(中畧)。夫れ法を重んずること師の操行の如く。德をひろむること師の眞風の如くならば。扶桑國中に宗風いたらざるところなく。天下徧く永平の宗風になびかん。汝等今日の心術。古人の如くならば。未來の弘通大宋の如くならん。云々。

弊祖の心操行持は。其此くの如し。千古の下實に人をして欣慕景仰措くこと能はざらしむ。而して弊祖滅後四百四十八年享保丁未に。江戸青松寺の秀恕禪師。弊祖化儀の始終を記せらる。簡にして要を得たり。今や繁を憚らず茲に錄しぬ。

越前州永平孤雲懷弊禪師。洛陽人。姓藤氏。相國爲通公九條之曾孫。黃門爲實卿鳥養之孫也。幼依横川圓能爲童子。試經得度。年二十一受具戒。精究止觀法相俱舍成實三論。貫通

旨趣。一日忽歎曰。大丈夫當離言自證。安能屑々入海數砂耶。遂杖錫遊方。初參多武峯覺晏和尚。嗣大日忍晏示以首楞嚴頻伽瓶之譬。師即知無空之去來。明無識之生滅。晏曰。汝曠劫無明。今日始消。時道元禪師歸國。寓洛之建仁。師往見之。以所證呈。元不肯。辭遊諸方。文曆甲午冬。再參深草。知有長所。乃傾誠歸向。翌年秋禀菩薩戒。一日。元擧一毫穿衆穴因緣。師於言下大悟。出衆作禮。元曰。汝何所見邪。師曰。不問一毫如何是衆穴。元微笑曰。穿却了也。師再拜而退。侍奉積久。盡達法源底。首衆分座。元聞其提唱。解頤。元開山永平。師戮力輔弼。每有法令。元必命師施行。師曰。和尚號令奈何不自行。必命某甲。元曰。荷擔大法。盡在子躬。雖子之齡高吾。而能永年大弘吾宗。子其

勉之。建長五年七月。元以疾告退。命師補住持位。八月。元入京師就藥。師亦侍從。親奉湯藥。及元歿。師躬負靈骨還山。如法安塟殫師資之義。由之一衆悅服。四方崇仰。而道價益高於天下。文永丁卯退東堂。立義介公紹其位。弘安庚辰夏示疾。大檀越藤金吾。波多野氏自洛來問候。師感其遠誠諄々垂示。檀越且感且悲。輒揮涙而返。又遣誡門人曰。我歿後火浴收骨。即瘞於先師之塔傍。勿別立塔。至八月廿四日。沐浴淨髮如平昔。及晡謂侍僧曰。先師夜半圓寂。吾當効之。時至。鳴鐘集衆。書偈擲筆顧視左右曰。珍重。溘然而化。壽八十三。臘六十三。停龕七日。顏色如生。闍維收靈骨如遺囑。師履行純實。自奉謙遜。言語無華。爲人所歸敬矣。元祖道彌布四海之中。瓜瓞綿々不絶者。由師副貳轉化之功也。有法嗣義介、寂圓、義演、義準、佛僧、道荐。

第二十三章　觀音導利院諸堂の建立

嘉禎元年大師年三十六。此の時に當りて。大師の德風自然に都鄙に薰徹し。緇素の參見問法するもの。恰も百川の海に朝するが如し。而して示誨の道場又漸く狹窄し。參學の道俗往々戸外に駢居するに至る。是に於てか法堂及び僧堂の建立を企圖したまひしに。一力を以て終功せんことを願ふもの頗る多し。然れども法堂は。後に正覺禪尼をして之を建立せしめ。僧堂は大師親ら廣く十方の施主を募りて。之を建立したまへり。蓋し從上佛祖の勝躅に倣ひ。十方の衆生をして造堂施佛の功德を積ましめらる慈悲に出づるものとす。其の化帖の序

に之が委曲を悉くしたまへり。曰はく。

宇治觀音導利院僧堂勸進疏

稽首和南して。敬て十方一切の諸佛菩薩。賢聖僧衆天上人間龍府八部。善男子善女人等に白す。一錢の淨信を以て。一處の道場を建立せんと欲する事。

右菩薩戒經に云く。若し佛子常に應に一切の衆生を教化して。僧坊を建立し。山林田園に佛塔と冬夏安居坐禪の處所とを立作せしむべし。一切の行道の處みな應に之を立てしむべし。若し爾かせざる者は。輕垢罪を犯すと。然れば寺院は是れ諸佛の道場なり。神丹の佛寺は天竺の僧院をうつせり。日本の精舍もまた彼を學ぶべし。其功大いに其德厚く。國々に傳り。人々にほどこすところあらん。吾れ入宋

歸朝より以來。一寺草創の志願を起して。日久しく月深しと雖も。衣盂のさゝふべきなし。今勝地一處を深草の邊り極樂寺の舊趾に得たり。觀音導利院と名く。薙草の上叢林ならず。此處に甲刹をかまへんとす。寺院の最要は。佛殿。法堂。僧堂なり。此中佛殿はもとよりあり。法堂いまだし。僧堂最も切要なり。今これを建立せんとす。其ていたらく。七間の堂宇をたて。堂内にへだてなく長牀を設て。僧衆集り住し。晝夜の行道暫もおこたらす。正中に聖僧を安じて。僧衆圍繞して住す。三寶一堂に歸崇する儀軌。行ひ來れること久しゝ。功德も多く佛事もひろまるべし。一力の終功を求むべしと雖も。徧く良緣を結ぶが爲めに。廣く十方を化す。是れ竺土漢土の勝躅なり。正法像法の僧儀なり。檀

主の名字を聖僧の腹心に收め置きて。卍字の種智とし。自他の文彩とせん。此中にさきだちて得道の人あらんには。彼れを此衆の導師とせん。善知識にあらざらんや。獨り人中をすゝむるのみにあらず。天上龍宮も化すべし。仙界冥府にも聞ふべし。只是釋尊所轉の法輪なり。法界の内外に及ぶことあらん。謹て疏す。

嘉禎元年十二月日　都勸緣　住觀音導利院　沙門釋氏

既にして事四方に聞え。遠近力を戮せ道俗子の如く來りて。金穀布帛委積山を成し。其の翌嘉禎二年四月僧堂竣工し。尋いで正覺禪尼法堂を造立し。藤原教家法座を喜捨し。其の他殿堂門廡厨庫三門浴室東司皆落成す。爰に於いて住持三寶の依止する所始めて具れり。

第二十四章　祝國開堂及び傳道儀則の大成

嘉禎二年大師年三十七。此の歳秋觀音導利院の伽藍總べて具備す。即ち命名して觀音導利院興聖寶林寺と稱す。此の後單に興聖寺と呼ぶは。其の略稱なり。十月十五日大師始めて祝國開堂の大禮を擧行したまふ。祝國開堂とは。宗門最大の典禮にして。尚今日に繼續せり。則ち法筵を法堂に公開し。今上陛下の聖壽萬歳を祝禱し。且其の嗣承の恩師を表白し。以て佛祖の聖教を擧揚するなり。然り而して曩の寺號の命名は。深く事由の存するものあり。抑〻觀音導利とは。觀音淨聖の世間を化道し。衆生を利益するの謂ひにして。大師の常に念

持したまふ白山明神は。佛法守護の統領なり。明神即ち觀音淨聖なるを以て。其の悲智雙運の妙德を顯詮せられしなり。又興聖寶林とは。二種の意義を聯稱したるものにして。其の一なる興聖とは。此の道場を以て佛祖單傳の大道を宣揚し。經國の大本を天下萬世に樹立し。以て神聖なる天壤無窮の聖運を興隆し奉る謂ひにして。即ち興聖の義たる宗門恒規の祝聖と畧ぼ其の趣致を同じふするなり。祝聖とは開宗以來宗門の各寺に於いて。大師の遺訓に遵由し。毎月朔望の早晨及び天長の令節に。大佛寶殿に就いて鄭重に讀經し。以て至尊陛下の聖壽萬安を祝禱し奉る法式を謂ふなり。次ぎに興聖寺號の一なる寶林とは。支那の初祖達磨大師より第六世の祖たる大鑑慧能禪師の止住したまひたる。曹谿山寶林寺の寺號を移

して。以て興聖と聯名稱呼したまひしものとす。是大師が深く大鑑高祖の道風を欣慕したまひしに由るなり。然り而して興聖寺の成立するや。大師は日夜四來の道俗を提撕接化せられしのみならず。又隨從の僧衆と夏冬の結制安居を修行したまひ。其の他日用百般の行事より。乃至一切の規矩法度等。總べて佛祖の戒律制範に遵由し。一も異なる所なし。靈山の一會儼然として未だ散ぜず。大智再現するも。亦之に尚ふることなし。是に於いてか始めて佛祖單傳の大道なる。無上正等正覺を宣傳擴充したまふの儀則は大成を告げたり。四條天皇特に興聖寶林禪寺の勅額を下し賜ひ。又神明來りて聽戒し。布薩毎に參見す。亦以て當時の教化を知るべきなり。蓋し我が朝に佛教の宣傳弘布せしより以來。住持の三寶に於いて。

眞實の佛制に依據したるは。正しく此の時に權輿せり。而して今日謂はゆる禪宗と稱するものゝ。我が國に公許せられて弘敎傳道したるも。亦正しく此の時に權輿せしなり。初め榮西禪師入宋佛祖の正宗を傳來したまひしと雖も。叡山南都の諸宗より。之が弘敎傳道を罣礙せられ。已むを得ずして顯密心の三宗を兼稱せられき。然るに叡山南都の諸宗は。尙未だ之に慊焉せずして。榮西禪師を流竄せんことを謀りしかば。禪師興禪護國論を著し。以て當時の人心を啓發して。僅に其の寃を雪ぐことを得られたり。當時叡山南都の諸宗は。皇室及び相家と。中世以還種々の貪緣を累藉し。橫肆驕慢人我層層たりしを以て。異宗他門の新に成立するを見れば。之が淑慝臧否を問はず。百方排擠せざるはなし。淨土の圓光大師。

眞宗の見眞大師等が念佛唱道も。此の時に前後なりしに。其の難詰排擠せられしは。亦他の人我の妄見に因由せずんばあらず。當に知るべし我が大師の。一世混濁の潮流に逆ひて。佛祖の正法を開闡したまふことの艱難なりしことを。然るに今時の人。動もすれば大師の當年に慘怛經營せられし苦辛を知らずして。偶然に我が曹洞宗の成立せしものなりと輕々に看過するは。眞に大師に辜負するの甚たしきものとす。大師四世の正嫡太祖弘德圓明國師は。能く當時の趣致を知りたまひしを以て。至切に大師の偉業を顯揚せられき。其の言に曰はく。

夫日本佛法流布せしより七百餘歲に。はじめて師（大師を云ふ）正法をおこす。いはゆる佛滅後一千五百年。欽明天

皇一十三壬申歳。はじめて新羅國より佛像等わたり。十四歳癸酉にすなはち佛像二軸をいれて渡す。然しより漸く佛法の靈驗あらはれて。後十一年といひしに。聖德太子佛舍利をにぎりてうまる。用明天皇三年なり。法華勝鬘等の經を講ぜしよりこのかた。名相敎文天下に布く。橘の太后所請として。唐の齊安國師下の人南都に來りしかども。その碑文のみ殘りありて。兒孫相嗣せざれば風規つたはらず。後覺阿上人瞎堂は。佛眼遠禪師の眞子として歸朝せしかども。宗風おこらず。又東林懷敞和尚の宗風。榮西僧正相嗣して。黃龍八世として宗風を興さんとして。興禪護國論等をつくりて奏聞せしかども。南都北京よりさゝへられて純一ならず。顯密心の三宗を置く。然るに師（大師を云ふ）

その嫡孫として。臨濟の風規に通徹すといへども。なほ淨和尚をとふらひて。一生の事を辨じ。本國にかへり正法を弘通す。實に是國の運なり人のさひはいなり。あだかも西天二十八祖達磨大師はじめて唐土にいるが如し。これ唐土の初祖とす。師またかくの如し。大宋國五十一祖なりといへども。今は日本の元祖なり。ゆゑに師はこの門下の初祖と稱したてまつる。

大師滅後夢住國師亦或る時。筆のすさびに當時の事情を錄せられたり。曰はく。

中比建仁寺の本願（榮西禪師を云ふ）入唐して。禪門戒律の儀傳へられしも。只狹牀にて事々しき坐禪の儀はなかりけり。國の風儀にまかせて。天台眞言などあひならべり。

一向の禪院の儀式は。時至りて佛法房の上人。深草にて大唐の如く。廣牀の坐禪始めて行ず。其の時は坐禪めづらしきことにて。信ある俗等拜し。貴ふとかりけりと。其の時の僧かたり侍り云云。

以上に於ける太祖弘德圓明國師の傳贊と。夢住國師の筆記とを彼此對照するときは。當時の趣致。及ひ大師の偉業を知るに於いて。思ひ半に過ぐるものあらん。是の歳十二月除夕。其の高弟懐奘禪師をして秉拂せしめらる。秉拂とは秉麈の義にして。麈尾を秉りて學人を接化する謂ひなり。大師の斯くせられしは。奘祖の道業既に熟したるを以て。此の時特に首座に任じ。自己に代りて。一會の僧衆を接化せしめられしなり。

第二十五章　教化の方針

第一　個人を主とせず國家を主とす
第二　貴族を主とせず平民を主とす
第三　速成を主とせず晩成を主とす

宇宙萬古の最大眞理を全提して。經國の大本を天下萬世に樹立するには。其の畢生の施設。固より尋常の軌轍を踐まず。脫俗超凡。往々人をして之が端倪を知るに苦しましむ。大師滅後既に六百五十年に垂んとすると雖も。世の大師畢生の心事を委曲すると稱するものは。大概猶ほ群盲の巨象を摸するが如く。或は其の耳を摸し。或は其の鼻を摸し。或は其の手を摸し。或は其の脚を摸し。或は其の尾を摸し。其の摸索捕

捉せし所を以て。之を漆桶箕箒に喩へ。各〻自ら全象なりと信ず。而して象の全體に至りては。竟に之を知らざるなり。然るに獨り先帝孝明天皇の聖勅は。大師畢生の心事を委悉したまひて。毫も餘蘊なし。抑〻凡そ宗教家の目的たる。時の古今を問はず。洋の東西を論ぜず。個人を主として以て國家に及ぼさざるものなし。然るに大師の目的は。國家を主として個人を主としたまはざるなり。其の國家を主として個人を主としたまはざりしは。蓋し當時擧世闇黑。天地反覆。上下顚倒。皇室の命脈は。縷絲に屬し。國家の形狀は。滅亡に瀕したるに原由したるものにして。抽象以て事蹟に照らせば。之を先にしては。承久戰亂の感慨悲憤。興聖建立の寺號命名。興聖開堂の祝國法要。之を後にしは。永平開闢の寺號命名。

北條時賴に還政の嚴誡等。是皆其の宣教の目的の國家を主としたまひしことを證するに足れり。其の擧措及び施設。已に此くの如くなれば。他の衆生化導の目的も。亦國家を主としたまひしこと知るべきなり。先帝聖勅の綸言に。興聖を城南に創め。吉祥を北越に闢く。玄化徧く覆ひて。芳聲遠く播き。九重想を延きて。萬里誠に契ふ。相門は貴を降り。武夫は勇を銷す。盛んなるかな妙機。大いなるかな道德とのたまひしは。其の宣教の目的とする所の。全く國家を主とせられしことを讃嘆したまひしなり。其の九重想を延き萬里誠に契ふとは。大師玄妙の化益は。禁闕縱使九重を阻て。山河任他萬里を隔つも。深く至尊の顧念を延き。厚く至尊の聖懷に契當したることを指したまへるなり。其の相門は貴を降り。武夫は

勇を銷すとは。大師玄妙の化益は。能く歴朝輔弼の相家をして積漸倨傲の氣焔を降伏せしめ。又中古以還因襲馴致の大小武族をして。驕慢不臣の暴戻を銷除せしめられたることを指したまひたるなり。當に知るべし大師畢生の教化方針は。國家を主として個人を主としたまはざりしことを。然り而して大師教化方針は。又社會の平民を教導することを主として。皇室相家を化益することを主としたまはざりき。我か朝古來各宗祖師の弘教傳道するや。南都にても。平安にても。大概皇室相家の門庭に出入し。貴族の化導を主として。傍平民に及びたりしなり。大師にして若し此の顰に傚はんと欲したまはば。曩の宋朝君臣を化益せられし伎倆を以て。之を戚縁深厚の皇室相家に試みんこと。固より難しとする所に非ざりし

ならん。然るに大師は平民の教化を以て。先天の專務と自信せられしなり。其の平民の教化を以て。厚く自ら任ぜられし所以のものは。經國の大本極致。實に之に勝るものなく。而して當時國家の情態。亦之より急且大なるものなきを以てなり。是の故に傳道儀則の大成以後は。其の弘教演法の事蹟に於いて。他の各宗祖師の如く榮譽顯達。赫々として以て人目を眩すものなかりき。又其の言教に於いても。門下及び後世の兒孫に示すものの外は。悉く假字和文にて。勉めて平易簡短を旨としたまへり。是皆其の教化の目的の。專ら平民に在りしことを知るべきなり。啻に爾かのみならず。後嵯峨上皇の紫衣を賜ふや。終身之を高閣に束ぬ。北條時頼の建長に布金するや。斷然之が懇請を固辭す。亦其の教化の目的の。專

ら平民に在りしこ知るべきなり。故に此の後別に興起したる臨濟各派は。京都に鎌倉に競ひて禪風を宣揚し。北條足利の歸崇を受け。又累朝天皇の信仰を得たるも。大師は言ふに及ばず。其の正宗を嫡傳する兒孫は。山に梯し海に航して。東は陸奥出羽の邊陲より。西は肥薩日隅の僻陬に至るまで。一鉢三衣教化に從事し。專ら平民の濟度に汲々たり。大師及び大師の兒孫にして。此の間皇室及び幕府に關する教化は。大師の北條時頼を接したまひしこと。大師四世の嫡孫太祖弘德圓明國師の。後醍醐天皇の十種の疑問に奉答したまひたると。大師六世の法孫通幻寂靈禪師の。細川頼之を接したると。大師七世の法孫にして。即ち通幻寂靈禪師の法嗣たる石屋眞梁禪師の。後龜山天皇を教導し奉り。多年結んで解けざりし。

南北兩朝の確執を融解せられし等の外は。寥々として別に聞く所なし。而して其の間京都鎌倉などには。皇室及び幕府より一寺だも建設寄附を受けたることなし。然るに六十餘州の上にては山村海陬に至るまで。大師の教風。漸々に彌布充塞して。壹萬四千の寺院を建設し。又其の寺院には。必ず佛祖の尊像と今上皇帝の尊儀とを奉安し。一般の平民をして身心共に歸仰する所を知らしめ。又必ず佛祖禪傳の大道を宣揚し。一般の平民をして身心共に依止する所を得せしむるに至れり。則ち大師滅後六百五十年の今日に於ても。尚一千餘萬人の檀徒ありて。優に佛教各宗の首班を占むるものは。誠に大師教化の方針が。平民の教導化益を主としたまひしに職由せずんばあらざるなり。先帝聖勅の綸言に。萬物を普濟し衆生を覺

悟すとのたまひ。又玄化偏く覆ひて芳聲遠く播くとのたまひしは。誠に大師教化の王土王民に普霑徧布したることを讃嘆したまひたるなり。豈由る所なしとせんや。然り而して大師教化の方針は。速成を主とせずして專ら晩成を主としたまひき。即ち其の一生に成功することを望まずして。之を後世の兒孫に成功せしむることを望みたまひき。夫宇宙萬古の最大眞理を全提して。經國の大本を天下萬世に樹立するは。固より至大至重の雄圖にして。之を一生に成功することは。能ふべからざるの事なりとす。故に大師は自己一生の成功を期せずして。範を百世の兒孫に貽したまへり。乃ち其の身心を永劫不朽に相續することを企圖したまへり。興聖の教化日月に普霑し。道價朝野を傾くる際に當り。孤錫飄然として越前の僻邑に向かひ。外には地方の平民を化導し。內には相續の兒孫を陶冶したまふ。而して此の相續兒孫の陶冶は。固より佛佛の洪範及び淨祖の懇誡に由ると雖も。而かも大師畢生の身心は。深く之に傾注せられき。其の永平清規。學道用心集。永平廣錄。正法眼藏等は。大概身心相續の爲めに。其の兒孫に貽範せられしものとす。之を筆して傳ふるもの且然り。之を筆せざる朝暮の垂訓は。其の幾何なりしを知らざるなり。其の身心相續を教義の端的に盡したまひしこと此くの如し。啻に爾のみならず。大師は又其の德報及び命報を貽して。以て身心相續の兒孫を庇蔭したまへり。蓋し大師の洗淨たる。殷勤鄭重を盡し。特に洗淨の法則を示したまへり。而かも猥に淨水を受用したまはず。而して受用の際には半杓を以て其

用途を辨し。殘れる半杓の餘瀝は必ず舊處に返付したまへり。又大師は其の身を終りたまふまで。紫緋等の褊衫裙子と金襴の袈裟とを着けずして。布衲布衣を受用したまへり。是福德の報果を。身心相續の兒孫に貽したまふものとす。又大師は平生弊祖に向ひて。弊祖の年齒。自已より長ずるも。自已の先つて入滅することを告げられ。典座教訓に於いては。深く釋尊の二十年の壽を貽して。末世の兒孫を覆護したまひしことを欣仰せられたり。夫大師は生死を解脫し。生死に於いて大自在底の機用を具へたまふ。故に五十四年を一期として。殘餘の命報を身心相續の兒孫に貽したまへり。大凡業を積み德を累ねて。後世兒孫の謀を爲すことは。古今世出世間に其の人なしとせざるも。自ら命報を捐てゝ。後世の兒孫に遺貽したるは。多く其の比類を見ず。而して大師の此くせられしものは。教義と德報と命報とを以て。之を後世相續の兒孫に圓滿具足せしめんとする企願に外ならざるなり。即ち大師自らの身心を永劫不朽に相續することを企願したまひしなり。即ち其の教化を一生に成功するの難きを知りて。之を後世相續の兒孫に成功せしむることを望みたまひしなり。教主釋尊入滅の夕べに遺教してのたまはく。我が諸〻の弟子。展轉して之を行ぜば。則ち如來の法身は。常に在して而かも滅せざるなりと。而して大師の兒孫は。實に能く展轉して。大師の法身を相續し。大師の行願を行取し。大師の身心を常在不滅ならしめたり。即ち大師は。宇宙萬古の最大眞理を全提して。經國の大本を天下萬世に樹立するに。有漏一生の身心を以て

之を成功せずして。無漏百生の身心を以て之を成功せしめられたり。先帝聖勅の綸言に。爾來瓜瓞綿々として。永平六百の星霜を閲し。馨香芬々として。楓宸一脈の天風に薫ずとあるは。即ち是の事をのべたまひしなり。然り而して大師の個人を主とせずして。國家を主とし。貴族を主とせずして。平民を主とし。速成を主とせずして。晩成を主としたまひし教化は。漸々に全國の武門武士及び農工商民の精神を支配し。之をして上下君臣の大義名分より。忠信孝悌の倫理綱常を領得して。之を躬行實踐せしむるに至れり。之を最近著明の事蹟に照して。其の一斑を指示するときは。嚮の先帝の聖勅の綸言を下したまひたる十五年の後に。王政復古の鴻業を見るに至りたり。而して此の鴻業を翼賛し奉りたる薩摩の島津氏。

長門の毛利氏。土佐の山内氏。肥前の鍋島氏を首めとして。加賀の前田氏。越前の松平氏。安藝の淺野氏。近江の井伊氏。出羽の佐竹氏其の他一百三十餘の大小侯伯は。其君臣共に祖先の微時より。綿々相續して大師聖教の感化を受けたるものとす。即ち王政復古の鴻業は。先帝及び今上陛下の宏謨碩畫と。其の他各種の事情とに由りて。之を大成せられしと雖も。薩長土肥の雄藩巨鎭及び其の他王事に盡瘁したる大小侯伯の。祖先以來大師の教化を受けたる素養。亦實に與つて力あるものとす。先帝の聖智。夙に此の事を稔知ましまして。其の綸言に。相門は貴を降り。武夫は勇を銷すとのたまへり。則ち大師玄妙の化益は。啻に歴朝輔弼の相家をして。積漸倨傲の氣焰を降伏せしめしのみならず。又中古以還因襲馴致の大小

武族をして。驕慢不臣の暴戻を銷除せしめしを謂ふなり。大師玄妙の化益の。深く先帝の顧念を延き。厚く先帝の聖懷に契當して。盛んなるかな妙機。大いなるかな道德とのたまひしもの。豈原由する所なしとせんや。誠に是原由する所ありしなり。然り而して大師教化の個人を主とせずして。國家を主とし。貴族を主とせずして。平民を主とし。速成を主とせずして。晩成を主としたまひたる結果は。豈啻に士農工商の精神を感化支配し。之をして上下君臣の大義名分より。忠信孝悌の倫理綱常を領得して。之を躬行實踐せしむるに止まらず。又四生六道をして齊しく出離得脱の勝果を得しめられしなり。而して又其の玄妙の化儀は。啻に既往に止らずして。幾百千年の後に及ぶものとす。蓋し衆生煩惱の無量なるが故に。佛祖の行願も亦無量なればなり。

第二十六章　興聖寺の在住及び其の化儀

嘉禎三年。大師年三十八。是より後寛元元年に至る七星霜の間は。興聖寺に在住したまへり。是より先天福元年に觀音導利院即ち興聖寺に移りたまひしより。前後住山十有一年なりとす。此の間四方道俗の參見聞法するもの。曾て間斷することなし。而して京洛の間に於いて。篤信檀越の懇請に應じ。枉駕說法したまひしこと一百餘回。受菩薩戒の弟子二千餘人に及ぶ。相模の國鎌倉淨土宗光明寺開山良忠上人。紀伊の國由良臨濟宗興國寺開山法燈國師を始めとして。其の他諸宗の名匠碩學の參學問法せしは。大抵此の際なりき。又二祖孤雲

懐奘禪師を始めとし。僧海詮慧の二禪師。及び三祖徹通義介寒巖義尹其の他義演義準等の諸禪師の他宗より歸投し。衣を更めて弟子となり。參禪辨道せられしも亦此の際なりき。義尹禪師は。後鳥羽天皇の御子にして順德天皇の御弟なり。當時興聖寺常在の雲衲常に五十人を下らず。規矩法度。齊整嚴密。一に佛祖の制範に依遵し。毫も觸犯せしむることなし。蓋し大師の屋裏は佛祖を陶冶する爐鞴にして。即ち大師百世の身心を製作する模型なるを以てなり。太祖弘德圓明國師の二祖孤雲禪師を傳贊せられし一節に。此の間の消息を漏らしたまひて曰はく。

いはゆる深草に修練の時。すなはち出鄕の日限をさだめらるゝ膀に曰く。一月兩度一出三日也。然るに師（二祖孤雲

禪師を云ふ）の悲母最後の病中に。師ゆきてみること。すでに制限をおかさず。病すでに急にして最後の對面をのぞむ。使ひすでにかさなるゆゑに。一衆悉くゆくべしといふ。師すでに心中におもひきはむといへども。又一衆の心をしらんとおもふて。衆をあつめて報じて曰はく。母儀最後の相見をねがふ。制をやぶりてゆくべしやいなや。時に五十餘人みないふ。禁制かくのごとくなりといへども。今生悲母。ふたゝびあふべきにあらず。懇請してゆくべし。衆心悉くそむくべからず。和尙（大師を云ふ）なんぞゆるさざらん。事すでに重し。小事に準すべからず。衆人の議みな一同なり。この事上方にきこゆ。和尙ひそかに肸公の心定りていづべからず。衆議に同ぜじと。はたして衆議を